

fig.82  
S D 201fig.83  
S B 201

S K204 北半は搅乱によるコンクリート塊が存在しており、調査をしていない。幅約150cmで深さ約43cmを測る、円形の土坑である。弥生中期後半の甃が出土している。

**3. ま と め** 今回の調査では中世後期～近世、平安時代末、および弥生中期後半の3時期の遺構を確認している。

とくに平安時代末の遺構面では、多数の柱穴を確認した。建物や柵列も検出しており、周囲には当該時期の集落が存在していた事実が確認できた。

また、弥生時代中期後半の遺構面では、竪穴住居と方形周溝墓を確認している。ただし、竪穴住居は弥生中期後半より少し時期を遡る可能性も残る。竪穴住居が方形周溝墓に削平されているため、弥生中期の居住域が墓域へと移行しているらしいことが、調査区内において確認できた。これは現在までの調査による成果とも一致するものである。なお、今回

の調査で確認された方形周溝墓は、現在までの楠・荒田町遺跡で確認されている方形周溝墓で、最も大きなものである。

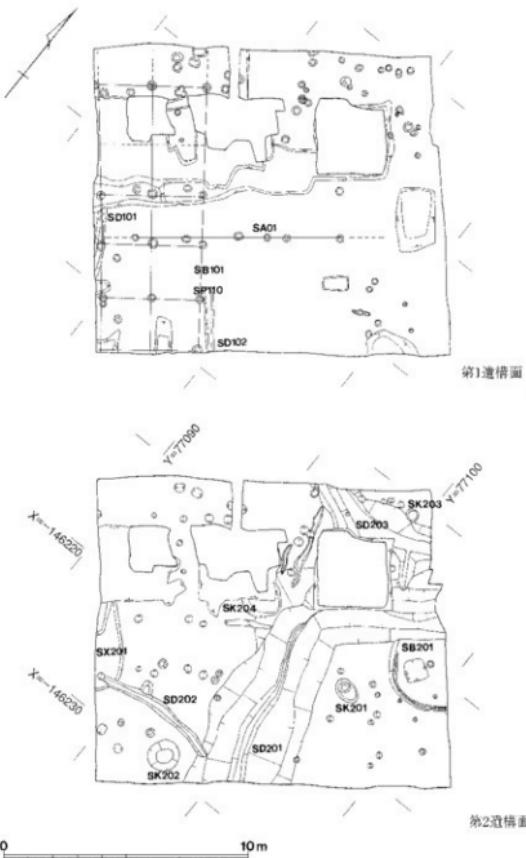


fig.84 調査区平面図

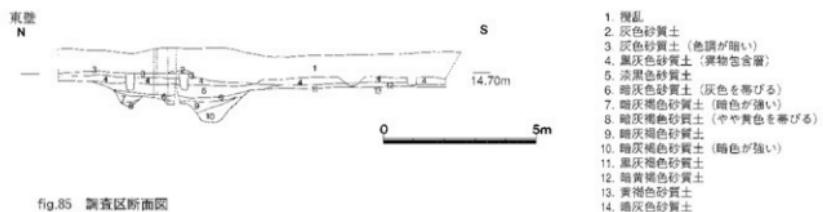


fig.85 調査区断面図

## 13. 楠・荒田町遺跡 第33次調査

### 1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、兵庫区荒田町1丁目、楠町6丁目を中心とする複合遺跡で、縄文時代後期から中世に至る豊富な遺構や遺物が確認されている。特に、弥生時代中期と平安時代末期に盛行する。弥生時代中期に集落が発展し、他地域から搬入された遺物の出土が見られ、広範な交流関係が推定されている。平安時代末期は、福原京関連の遺構が検出されており、北に隣接する紙屋遺跡と同様、貴族社会の生活を忍ばせる庭園や堀などの遺構が検出されている。

fig.86  
調査位置図  
1:2,500



### 2. 調査の概要

個人住宅建設により文化財が影響を受ける範囲に設定した調査区である。重機により表土および耕土層を除去した後、人力による調査を実施した。遺構検出面は盛土または旧耕作土直下で検出された。包含層は残存せず、後世の掘削により本来の遺構面は失われている。

検出された遺構は、柱穴、ピット、土坑である。それぞれの帰属時期は、時期を特定する遺物の出土がなく不明である。

**柱穴・ピット** 直径20~30cmの柱穴、ピットが37基検出された。方位を意識した並びが見られるが、建物としての纏りは確認できない。遺構埋土の違いから、2時期以上の遺構が同一面で検出されたと考えられる。

**土坑** 調査区の制約により、全体の規模については不明であるが、直径約60cm、深さ約15cmの円形の土坑と考えられる。遺物は出土しなかった。

**3. まとめ** 今回の調査地は遺構面が大きく損なわれており、遺構の時期や本来存在したと考えられる建物の形状を特定するには至らなかった。しかし、遺構の検出密度は高く、集落の居住域内に相当すると考えられる。

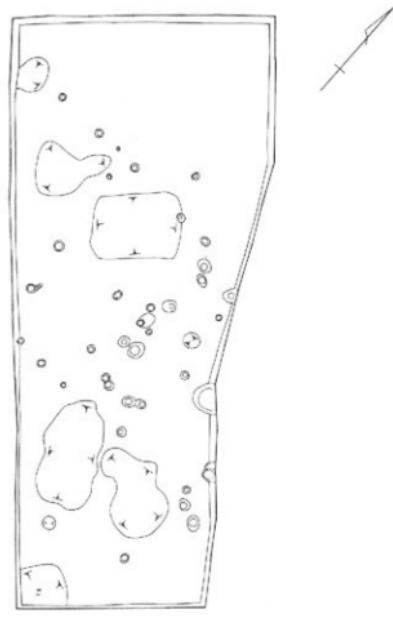


fig.87  
調查区平面图

0 5m



fig.88  
調查区全景

## 14. 祇園遺跡 第11次調査

### 1. はじめに

祇園遺跡は、神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があった。

祇園遺跡においてこれまでに行われた発掘調査は10次におよび、第2・3・5次調査で確認された平安時代末、福原京の時期の園池は平氏政権の中枢に位置する人物の邸宅庭園と推測され、注目される。

fig.89  
調査地位図  
1:2,500



**柱穴** 柱穴状の遺構 S P02は径約30cmのプラン円形の土坑。深さ18cmをはかる。埋土から弥生時代末の高杯が出土した。

**3. まとめ** 建物の基礎部分のみと小面積で分断された調査ではあったが、福原京期の遺構・遺物が確認され、一定の収穫を得ることができた。柱穴のみとはいえたが、福原京期の遺構・遺物が確認されたのは初めてのことである。そのうち柱穴S P03の底には礎板石が存在し、このことからは上部の建築はパラック的なものではない重量のある建物であることが推測される。また今回の調査区では山城製の瓦が出土している。これまでに行われた調査により、この遺跡における瓦の出土には偏在性が認められている。その集中する付近には建物の存在が推定され、今回の調査地付近にも建物の存在する可能性が高い。山城製の瓦は平安京から移築された建物とセットで招来されたものと考えられ、ここに存在した建物は京都からの移築建物である可能性が高い。



fig.90 SX02

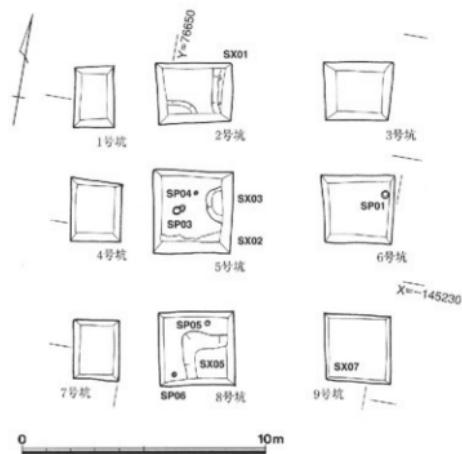


fig.91 調査区平面図



fig.92 2号坑



fig.93 9号坑

## 1. はじめに

この遺跡の存在する地域は平野とよばれ、この地名が治承四年の「福原遷都」に際し安徳天皇の皇居となつた平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中核があつたものと推測される。

考古学的には、1981年、ここ平野から600mほど南、平頼盛邸があつたと伝えられる荒田の地において2本の堀や大型の掘立柱建物が検出されたのを端緒として、1986年の雪御所遺跡、また1993年に始まる祇園遺跡の発掘調査において、「福原京」にかかわる遺構・遺物が継続的に確認されるようになった。幻といわれた「福原京」の姿が一部とはいえ明らかになり、福原旧都の具体的な解明を行う資料が蓄積されつつある状況にある。

このほか、縄文時代・弥生時代・室町時代などの遺構・遺物が確認されているが、そのなかで弥生時代末ないし古墳時代はじめの堅穴住居は数も多く、当地にこの時期の有力集落があつたものと推測される。

今回の発掘調査は、店舗建築に先立つもので、建築工事により遺跡の破壊される建物の基礎部分約60m<sup>2</sup>についてこれを行つた。



fig.94  
調査地位図図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

中世1面と弥生時代1面、計2枚の遺構面がある。両遺構面の間層はごく薄く、多くの部分では同一面での遺構検出となった。以下概要について記述する。

**平安時代以降** 平安時代末の表土層からは、遺物が比較的多く出土し、遺構は柱穴・土坑・溝が検出された。

## 柱穴

4基（ないし5基）検出された柱穴のうち3基は時期を判断できる遺物の出土がなく所属時期の認定が困難である。同一の建物を構成すると推測されるS P03・04は、埋土の状態が若く時代が下る可能性が高い。S P01は攪乱により残りが悪い。S P02のみ平安時代末の土器片が出土し、この時期の遺構である可能性が高い。

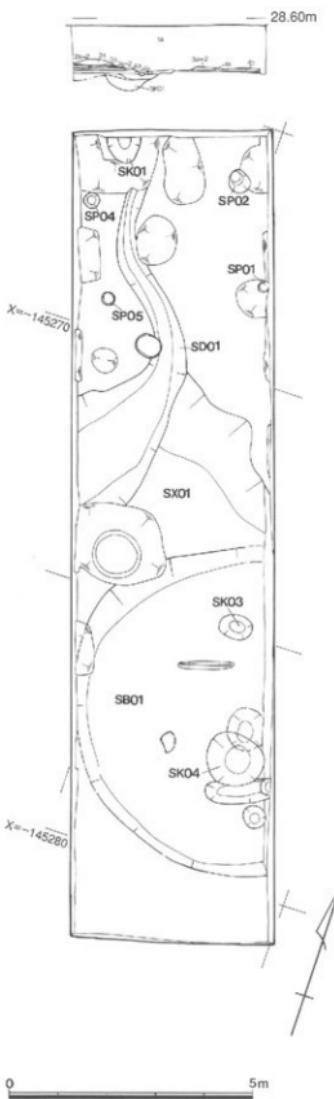


fig.95 調査区平面図・断面図



fig.96 S K04



fig.97 S B01(南部) 遺物出土状況



fig.98 S B01(中～北部) 遺物出土状況

S K04 径約1.1mのプラン円形の土坑で遺構確認面からの深さは約25cmである。平安時代末の遺構と考えられる。

弥生時代 壁穴住居・土坑・溝など弥生時代末の遺構が検出された。

S B01 径約6.8mのプラン円形の壁穴住居で遺構確認面から床面までの深さは約60cmを測る。径約90cmで断面が掘鉢形の中央土坑が確認できたが、柱穴は判然とせず、1本分を確認したにとどまる。

床面には土器が残される。北部・南部それぞれで壺ひとつと複数の高杯が纏まつたかたちで出土している。特に南部の土器集中部の遺存状態は良好で、4個の高杯がならべられた状況のまま出土した。ただしこれらの高杯は脚部襠が割られ現地に存在しなかった。

このほか、住居址の埋土中位から上位で礫の集中する部分が2ヶ所あった。礫のレベルは東が浅く西が深いという状況があり住居の埋没過程でその凹みに礫が放り込まれたものかと推測される。

S D01 幅40~50cmの蛇行する溝で南部は約2mと幅が広くなる。

S X02 この部分に人頭大までの礫が詰め込まれる(S X02)。礫の間、また上流部分埋土とともに弥生時代末の土器が出土している。

S K01 径約1mのプラン円形の土坑で遺構確認面からの深さ約35cmを測る。弥生時代末の甕1個体が出土した。



fig.99 S X01

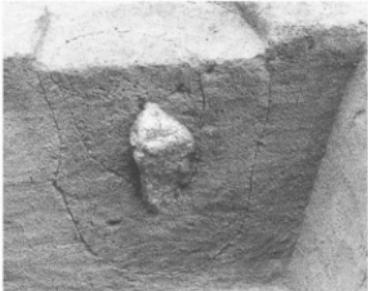


fig.100 S P02

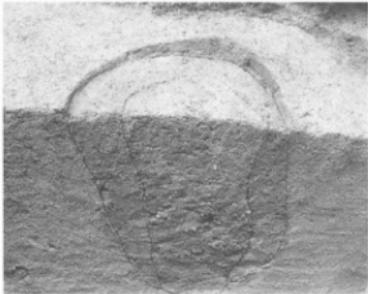


fig.101 S P04

3. ま と め 上祇園町を南北に縦断する国道428号線の拡幅工事に伴う発掘調査においては、第3次調査地点のみ遺物の集中があったが、基本的に第2次調査で確認された匂池から南に下るに従い、平安時代末の遺構・遺物はともに稀薄になる傾向があり、今回の西に隣接する地点付近ではこの時期の遺構・遺物は確認されていなかった。

今回の調査では遺構とともに比較的多くの遺物が確認され、新たな遺構・遺物の集中地点の存在を確認できた。当地周辺に屋敷建物など、遺構として確認できる施設の存在が推定される。S P02が掘立柱建物の一部である可能性もあるだろう。

当地は福原の中核部にあたり、おそらく方一町を単位とする邸宅群が集まる地域と考えられるが、1/2,500地図でみると今回の調査地は条里単位の中央南寄りにあたる。条里を屋敷地にそのまま当てはめてよいならば今回の調査地付近は屋敷地南前面中央ということになり、そういう位置に存在する施設ということになろうか。

弥生時代末期の堅穴住居から出土した遺物の出土状態についても興味深いものがあった。南部で出土した土器は正位で並べられた状況を保っているとしか見えない。裾を割られ自立しない高杯を立てるためには、脚部を土に埋めるか木製の器台を用いたと推測される。供歌物をのせるというこの土器の持つ意味合いを考え合わせ、裾を割って正位では自立しない4個の高杯をわざわざ正位できれいにならべるという行為がどういう意味をもつものなのか興味ある事例である。また北部で出土した土器も甕1個と高杯複数という組み合いで共通しており、この点も注目される。

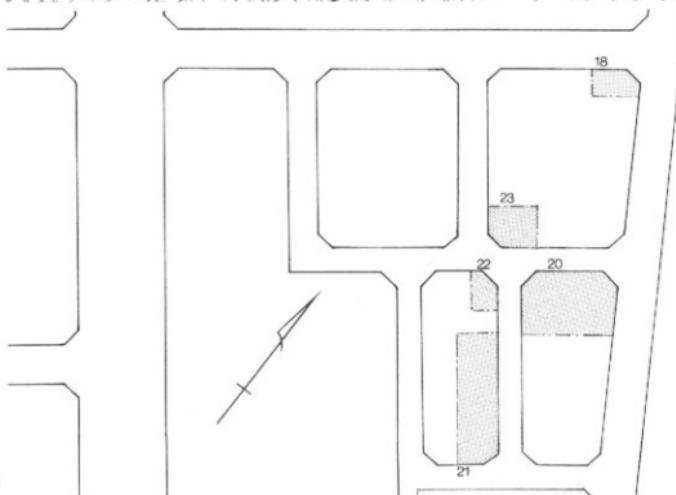
fig.102  
調査区全景



## 1. はじめに

兵庫松本遺跡は、兵庫区松本通2丁目を中心広がる遺跡である。当遺跡は、震災後に発見され、これまでに、市営住宅の建設や区画整理事業に伴う数次にわたる発掘調査を実施している。その結果、縄文時代晚期から現在に至る長い期間に渡る生活の痕跡が確認されている。特に、弥生時代末から古墳時代初頭の遺構や遺物の検出が多い。

近年、区画整理事業の進行に従い、個人住宅や共同住宅建設に伴う発掘調査が増加している。本年度は、6件の調査を実施した。



## 兵庫松本遺跡 第18次調査

**1. 調査の概要** 今回の調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査区は東西に長く、北から南にやや傾斜している。

**基本層序** 調査区は盛土・搅乱層が2m程度と厚く堆積している。層位はこの下から、灰色砂質土(耕土)、灰黄色砂質土、橙茶色砂質土(床土)、灰褐色砂質土(第1遺構面)、淡灰褐色極細砂シルト、灰黄色極細砂シルト(第2遺構面)となっている。

**第1遺構面** 第1遺構面では、灰褐色砂質土層上面から切り込むピットを13基と落ち込み3基を確認した。弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構面と考えられる。

ピットは直径20～30cm、深さ16～24cmを測る。柱

痕は確認できていない。埋土は、暗灰褐色砂質土・粗砂質土で、調査区内で掘立柱建物とはならなかつた。

3基ある落ち込みのうち、SX01は立ち上がりがやや急であること、凹丸方形な形状をしていることから、竪穴住居の可能性も考えられるが、北に接する道路の調査では検出されていない。深さは20cmを測り、埋土は暗灰褐色粗砂質土、灰茶色砂質土である。

**第2遺構面** 第2遺構面は灰黄色極細砂シルト上面で東西方向の河道を1条検出した(SR201)。幅約2.0m、深さ0.8mを測る。断面から大きく2時期に分かれると考えられる。粗砂～中砂、細砂のラミナによる埋土をもつ時期と、最終埋土である淡灰茶色細砂シルト層で埋まつた時期があると考えられる。遺物の多くは、最初に埋まつた段階の土器がほとんどであった。磨滅しているものもあるが、遺物の状態は河道にしては良好と思われる。

また、底面に堆積する遺物を含まない黄褐色極細砂シルト層は、第2遺構面のベース層である灰黄色極細砂シルト層の下層へ潜り込んでいくことから、さらに時期の遡る河道があった可能性が考えられる。底面においても湧水は確認していない。

**2. まとめ** 今回の調査は、調査面積が小さいにもかかわらず、多くの弥生土器が出上した。特に、第2遺構面の河道からは弥生時代後期の土器が多く出土している。

それぞれの遺構の時期については、遺物の整理が進んだ段階で改めて言及したい。

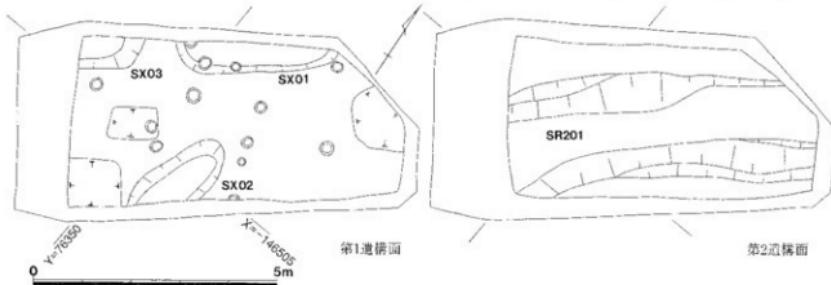


fig.106 調査区平面図

## 兵庫松本遺跡 第20次調査

### 1. 調査の概要

調査地は、平成15年度に実施した第19次調査地のII区の南側に接する場所にある。個人住宅建設に伴う調査で、埋蔵文化財が工事の影響を受ける部分について調査を実施した。現標高は9.8mから10.6mを測る。

### 基本層序

上層より、盛土、旧耕土、中世の耕土層の堆積が見られ、その直下で遺構面が検出された。遺物包含層の大半は中世の耕作により失われている。調査区は、南北方向にのびる微高地に位置し、弥生時代末から古墳時代初頭の居住域が検出された。下層からは、弥生時代前期の遺物を含む砂層をベース面とする自然流路が1条検出された。

### 第1遺構面

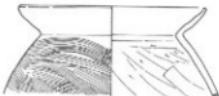
平安時代後半～鎌倉時代前半の水溜遺構を1基検出した。(平面図は第22次調査参照)

### 第2遺構面

弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺構面である。

#### S B103

当居住は北側に2回拡張されている。当初は東西4.4m以上、南北3.8mの規模で、その後、東西4.5m以上、南北は4.7mの規模に拡張し、さらに長辺7.3m、短辺6.5m以上に拡張している。床面からは、土器の他に、鉄鉢1点、勾玉1点、ガラス玉1点が出土した。



#### S B104

長辺3.9m、短辺3.7mの方形の竪穴住居である。切りあい関係から、S B108・S B112より後に出する遺構である。



fig.107 S B103出土遺物実測図

#### S B105

隣接する第7-1次調査区で確認された竪穴住居(S B104)の北東コーナー部と東辺部を検出した。

#### S B106

長辺約4.6m、短辺4.2mの竪穴住居である。南辺が北辺より長く平面形は台形である。切りあい関係から、S B114に先行する住居である。

#### S B107

長辺約6.2m以上、短辺5.8m以上の方形の竪穴住居である。切りあい関係から、S B108・



fig.108  
S B107

S B105より後出することが確認できる。

当住居が廃棄されて、中央部に窪みが残る程度に埋没した段階に、100個体を超える土器が投棄された状態で出土した。

**S B108** 長辺6.3m、短辺6.2mの方形の堅穴住居である。S B104・S B107に先行する。

**S B111** 直径約7mの弧を描く溝が検出された。直上層の中世の耕作による影響を強く受け、5~10cm程度の深さが検出されたに過ぎない。切り合い関係から、S B113より新しい造構である。円形住居が消滅する時期であることや、当遺跡内で円形の堅穴住居が検出されていないこと、周壁の立ち上がりが確認できることなどから、積極的に堅穴住居であると判断しがたいが、平面形状から堅穴住居の可能性が高い。溝内より遺物が出土した。

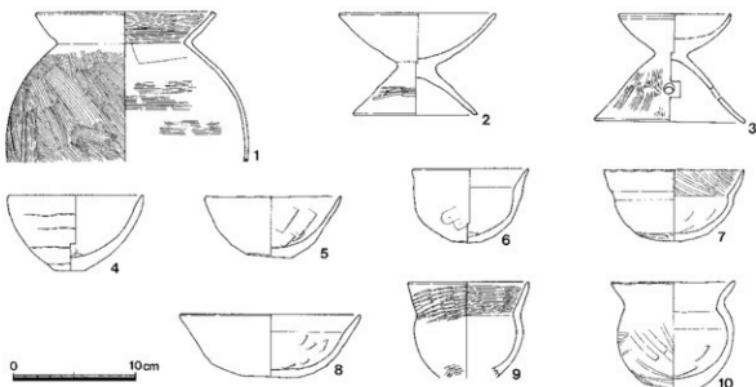
**S B113** 南東部は調査区外であるため、詳細は不明であるが、長辺5.1m、短辺4.2mの方形の住居と復元できる。

**第3造構面** 主な造構は、自然流路と、柱穴、土坑等である。ベースとなる淡灰色砂質土からは、弥生時代前期の遺物が散見されるが、造構は検出されなかった。

**S D201** 第19次調査II区の北端コーナー部から、ほぼ南北方向に流下する自然流路である。幅約1.4m、深さ約80cmを測る。S次形に屈曲する部分は、流路の下部を強く侵食している。埋土は砂質が強く、滞水することなく流水していたと考えられる。埋土から弥生時代中期の遺物が少量出土したが、磨耗が進んでいる。居住域が形成される以前に埋没していることから、弥生時代中期以降、庄内併行期までの時期の造構である。

**2. まとめ** 今回の調査で、調査地一帯に弥生時代未から古墳時代前期の集落が存在することが明らかになった。兵庫松本遺跡内では、最も造構密度の高い場所であり、豊富な遺物量と合わせ、六甲山南麓地域の土器編年を考える上で重要な資料を得る事ができた。

詳細については、平成16年3月刊行の『兵庫松本遺跡発掘調査報告書』を参照されたい。



1・3・6・7・10: SK01 5: 北東部 2・4・8: SP02 9: SP03

fig.109 出土遺物実測図

## 兵庫松本遺跡 第21次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の梁・基礎部分のみの調査を実施したため、東西方向に幅2.0~2.5mのトレンチを5本設定しており、北から順にⅠ~Ⅴ区と呼ぶ。なおⅠ区は第20次調査地に接している。

調査区の地形は、第19次調査でも確認できたように北から南に緩やかに傾斜しており、南へいくほど造構は希薄であったが、方形の掘形をもつ掘立柱建物の柱穴が確認されるなど、これまでにあまり確認されていない造構が検出できた。また、第19次調査で検出されている竪穴住居の東辺が確認できた。

**基本層序** 上層より、盛土・攪乱、淡灰橙色砂質土・淡灰色砂質土(旧耕土)、橙黄色砂質土・黄橙色砂質土(床土)、暗灰褐色石混じり砂質土(遺物包含層)、淡褐色石混じり砂質土・黄灰色粘質土(第1造構面)、黄灰色シルト(第2造構面)である。遺物の詳細はまだ明らかでないが、これまでの調査から、どちらの面も弥生時代後期~古墳時代前期の範囲におさまると考えられる。また第2造構面の造構は非常に希薄であった。

北側の調査区は砂質が強く、南側について粘質が強い傾向があった。またⅡ区については、黄灰色シルト層の下層に北西から南西方向へ落ち込む灰褐色炭混じりシルト層があり、弥生時代前期の遺物を含んでいた。影響深度の関係上、断ち割り調査にとどめている。

**竪穴住居** 竪穴住居はトレンチ調査であるため一部しか検出できていないものがほとんどであるが、可能性のあるものを含めると6棟確認した。

**S B115** Ⅲ区で検出した。第19次調査区のS B101と同一の造構と考えられる。ただし、この住居は東へ約0.3m拡張しているため、ベッド状造構の状況が明確にできなかった。造構面からの深さは0.5mと残存状況がよかったです。検出された柱穴は1基で直径約20cm、床面からの深さ約1.4mを測る。

また、この住居は埋土の上層で炭化層が確認できることから、この層に含まれる炭化物は焼失した屋根材である可能性も考えられる。残存状況のよい炭化材のサンプル取り上げを実施している。

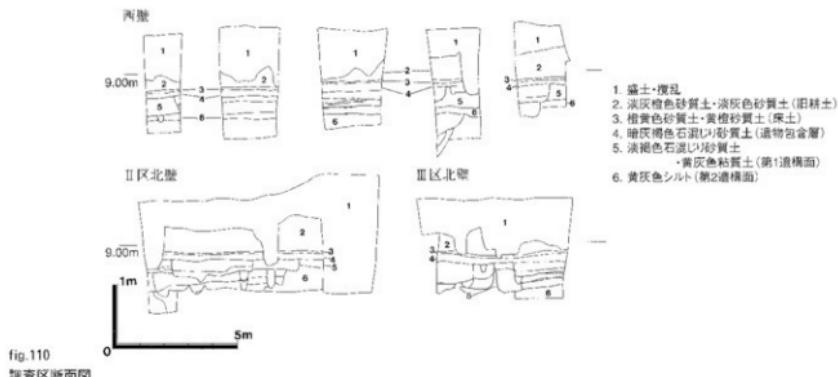




fig.111  
S B117



fig.112  
S B120

S B117 II区西半で検出した。一辺は3.0mで、この遺跡において他に確認されている住居と比較してやや小さい。東西辺にベッド状遺構を有し、南辺には土坑が1基設けられ、蓋1個体分の破片が出土している。また、ベッド状遺構の上面より鉄鎌が1点出土している。

S B120 II区で検出し、S B117の下層に位置する。一辺4.4mを測る。中央やや西よりに堤のある焼土坑を有し、底面に2cm程度の炭の堆積が確認できた。

S B122 III区で検出し、大半は調査区外へと抜がっている。円形の住居は遺跡内では2棟目の検出となる。深さ40cm、周壁溝は幅20~30cm、深さ10cmを測る。

掘立柱建物 IV区・V区で検出した。同一方向であるため、同じ建物と考えると3×3間以上の建物

が復元可能である。柱間距離は芯々で1.4~1.6mを測る。柱掘は隅丸方形か精円形で、長辺50cm、短辺30cm、深さは40~80cmを測る。残存する柱芯の直径は10cm、礎盤を底面に置くものも確認できた。遺物は土師器の破片が少量出土している。また、II区の堅穴住居と切り合いのある直径50cm程度の柱穴を5基検出した。トレンチ内で建物には纏まらないが、堅穴住居が埋まった後に、掘立柱建物が存在した可能性も考えられる。

**S D01** V区の第1造構面で検出した、幅30cm、深さ10cmを測る東西方向の溝である。土師器の破片が少量出土している。

**2. まとめ** 今回の調査は、トレンチ調査であったため検出された住居の規模が判然としないものが多く、周壁溝・ベッド状造構などそれぞれの住居についての付随施設が確認できないものもあった。しかし、これまでの調査成果をあわせると、堅穴住居の存在する範囲をより明確にすることことができたといえよう。

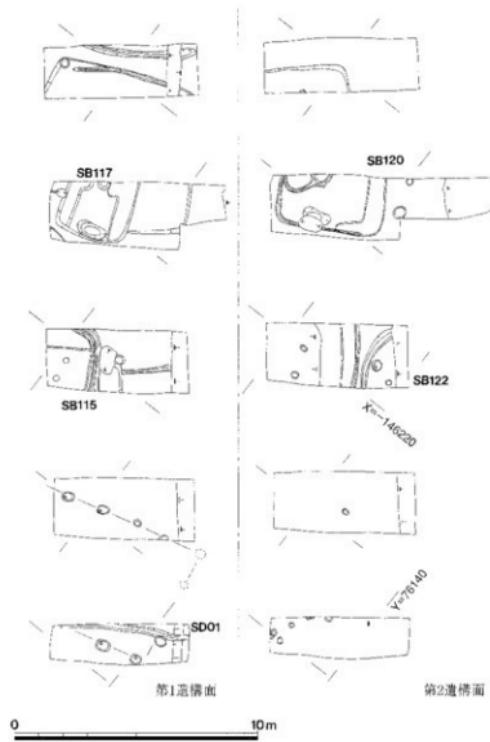


fig.113 調査区平面図

## 兵庫松本遺跡 第22次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。遺跡に抵触する部分に杭基礎が約20本入ることから、第19次調査において検出された竪穴住居のコーナーを検出することを主眼として、2本のトレントを設定して調査を実施した。

**基本層序** 上層より、淡灰色砂質土（旧耕土）、橙灰色砂質土（床土）、灰褐色砂質土（遺物包含層）、褐茶色シルト（第1遺構面）、淡灰褐色シルト（第2遺構面）となっている。

**検出遺構** 竪穴住居（第19次調査 SB114）の南西コーナーを検出し、住居の規模が判明した。一边6.8m、深さ50cmを測る。

その他に、柱穴2基を検出した。どちらも直径30cm、深さ30cmを測る。遺物はほとんど出土していない。

第2遺構面は、これまでの調査からも遺構の少ない傾向にあり、今回も遺構は検出されなかった。

### 2. まとめ

今回の調査は、工事の工法上損壊部分の全てを調査することのできないものではあったが、当初の目的とした竪穴住居の規模は判明した。

それぞれの遺構の時期については、遺物の整理が進んだ段階で改めて言及したい。

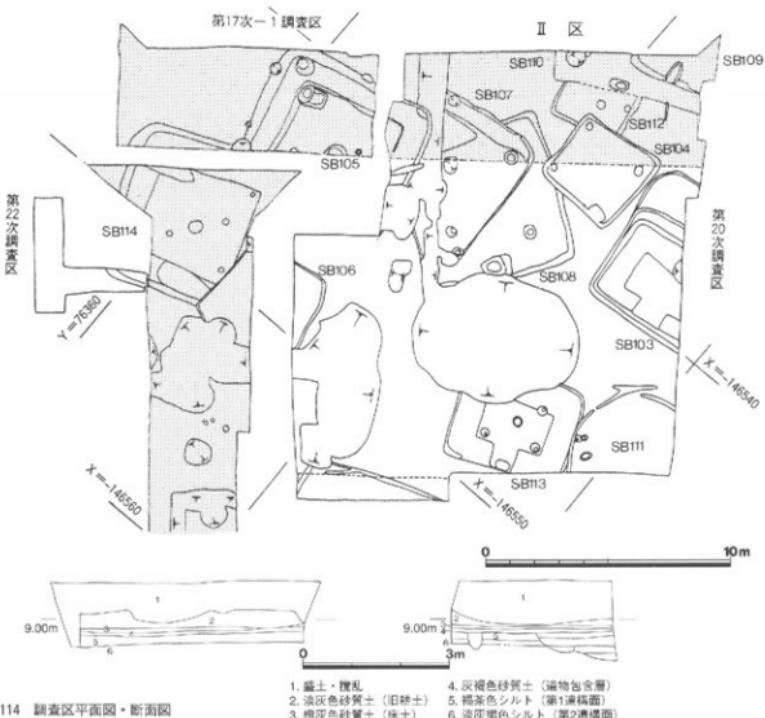


fig.114 調査区平面図・断面図

## 兵庫松本遺跡 第23次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査地は、第12-1次調査（平成14年度調査）の西隣で、第17-1次調査（平成15年度調査）の北隣にある。

調査は、新築建物の基礎杭部分を数本単位でつなぐかたちで調査区（1～7区）を設定して実施した。なお工事影響深度は現地表下約2.2mで、既調査成果から影響深度付近にも埋蔵文化財が存在することは明らかであるが、調査区の幅が80cmと狭く、下層の掘削は困難であったため、現地表下1.4m程度までの調査に止めた。

### 基本層序

調査の結果、現地表下約1.0mで弥生時代末～古墳時代前期の遺物包含層である灰（褐）色～（暗）灰褐色シルト質細砂（厚さ5～17cm）上面を検出した。この包含層の下面の淡褐色～淡灰色シルト質極細砂～細砂上面が第1遺構面である。

### 第1遺構面

堅穴住居、土坑、溝、ピット、落ち込みを検出した。これらの遺構については同一面で確認し、上層の遺物包含層出土の遺物などから、弥生時代末～古墳時代前期の時期の中で捉えられるものと考えられる。検出した遺構には、遺物包含層が埋土となる土坑・溝・ピットと、これらに切られる堅穴住居・落ち込みに分かれ、時期差がある。双方の各遺構の詳細な時期については、今後の整理作業の進展を待って検討したい。

### 溝

溝は、1区東端～2区北端で2条、3区中央で1条検出した。1区東端～2区北端で検出した南北方向に流れる幅20cm、深さ17cmの溝は、規模などの面から堅穴住居の周壁溝の可能性も考えられるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。

### 土坑

4区中央で1基検出した。径65cm×35cm以上で、深さは7cmを測る。性格については不明である。

### ピット

7区中央で検出した1基は、切り合い関係から堅穴住居よりも新しい時期のものである。第17-1次調査でも同様なピットを確認しており、同一の柵列あるいは建物を構成するものの可能性も考えられるが、今後整理作業の進展とともに検討を加えたい。径34×25cm以上、深さ25cmを測る。

### 堅穴住居

確実に堅穴住居と判断できる遺構は、4・6・7区で検出したもので、おそらく第12-1次調査・第17-1次調査で確認されているSB103と同一の遺構と考えられる。

4・6区で検出した遺構は住居の北辺部分で、4区では周壁溝も確認している。6区部分にも周壁溝が存在する可能性が考えられるが、南側の調査区外にあたるため詳細は不明である。7区は、調査区内全域が住居の内部にあたる。調査区東半で土坑を確認したが、内部に薄い炭層が堆積することから、住居の中央土坑（炉）と考えられる。この中央土坑の周囲に幅2～10cm、高さ1～5cmの高まりがみられ、中央土坑に付随する周堤と考えられる。中央土坑は径60×50cm以上、深さ10cmを測る。なお、中央土坑の周囲でピットを3基検出したが、性格については不明である。

### 第2遺構面

第1遺構面の基盤層の直下に暗灰褐色シルトの堆積がみられ、弥生時代後期頃のものと考えられる遺物を少量含む。この層を第2包含層として捉え、その下面の淡褐色シルト質極細砂～細砂上面を第2遺構面として調査を実施した。この面が第12-1次調査で確認されている第2遺構面に相当すると考えられるが、調査の結果、明確な遺構は検出されなかった。

2. まとめ 今回の調査では、調査区の幅が狭く工事影響深度である、現地表下約2.2mまで掘削・調査することはできなかったが、現地表下約1.4mまでの調査を実施した結果堅穴住居などの遺構を確認した。検出した遺構は弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えられ、隣接地で実施した既調査成果と符号し、補強するものである。詳細な検討は今後の整理作業の進展とともにを行う予定であるが、当該時期の集落域が当調査地にも広がっていることが確実となった。

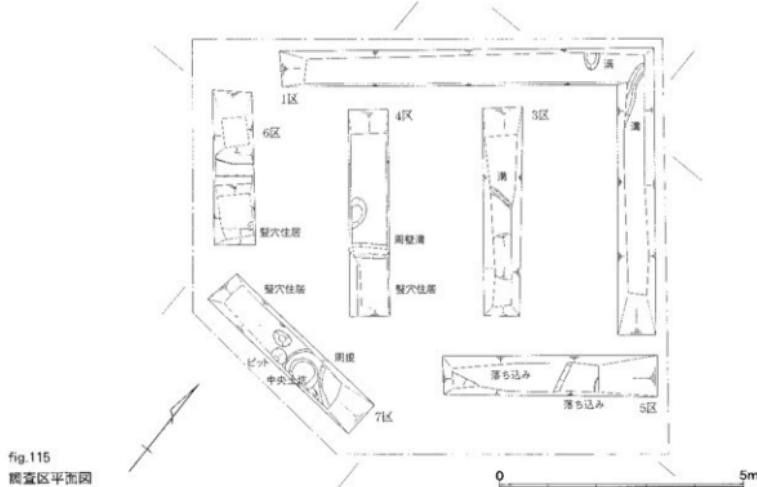


fig.115  
調査区平面図



- |              |                      |                        |
|--------------|----------------------|------------------------|
| 1. 茶褐色細砂     | 6. 黄褐色シルト            | 11. 灰(褐)色～(暗)灰褐色シルト質細砂 |
| 2. 灰(淡)色細砂   | 7. 黄灰色シルト            | 12. 淡褐色～淡灰色シルト質細砂～細砂   |
| 3. 暗黄褐色～灰色細砂 | 8. 灰(黄)色シルト混じり細砂     | 13. 暗灰褐色シルト            |
| 4. 灰茶色細砂     | 9. 黄灰色シルト            | 14. 淡褐色シルト質細砂～細砂       |
| 5. 暗茶灰色細砂    | 10. 灰色～(暗)灰色細砂混じりシルト |                        |

fig.116 調査区断面図

## 17. 兵庫松本遺跡 第19次調査

### 1. はじめに

兵庫松本遺跡は、六甲山系から流れる旧湊川をはじめとする幾つかの小河川によって形成された扇状地上に位置する。平成10年度に市営住宅建設に伴い初めてその存在が確認され調査が行われた、比較的新しく発見された遺跡である。近年は区画整理事業に伴う調査によって飛躍的に明らかになりつつある遺跡である。

調査地は、区画整理による道路部分で平成14年度に実施した第17-1次調査区の南側及び東側に隣接する場所にあたる。

現標高は9.8mから10.6mを測る。

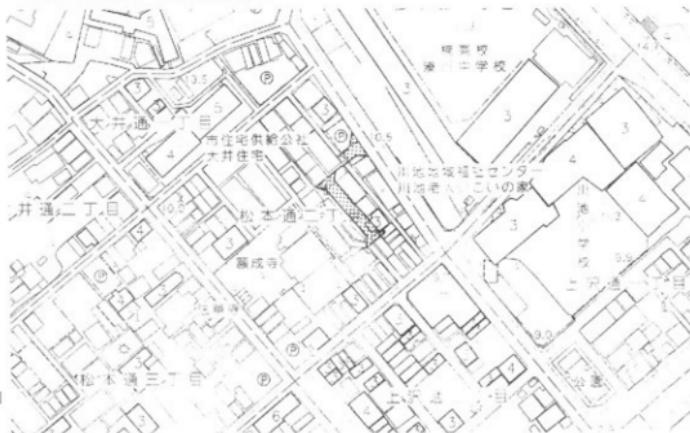


fig.117  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

西側の調査区をI区、東側の調査区をII区と呼称する。I区の南半部では、弥生時代末～古墳時代初頭頃の造構面が2面確認できたが、北半部及びII区においては、後世の耕作の影響により、造構面の鑑別はできなかった。さらに下層からは、弥生時代末以前の造構面が1面確認された。

#### 基本層序

上層より、盛土、旧耕作土、中世の耕作土の堆積が見られ、その直下で造構面が検出された。包含層はI区南半部でわずかに存在するが、基本的には残存しない。

#### 第1造構面

I区において弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居1棟をはじめ、柱穴、土坑、袋状土坑、溝状造構が検出された。

#### 第2造構面

I・II区において弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居、柱穴等が検出された。

#### 第3造構面

主な造構は、自然流路と柱穴、土坑等である。また、造構面基盤層となる淡灰色砂質土からは、弥生時代前期の遺物が散見されるが、造構は検出されなかった。

### 3. まとめ

今回の調査では、特に庄内式併行期から布留式併行期の良好な資料を得ることができた。なお、本調査の詳細な成果については、平成18年3月刊行の『兵庫松本遺跡 第2～4・12・17・19次発掘調査報告書』を参照いただきたい。

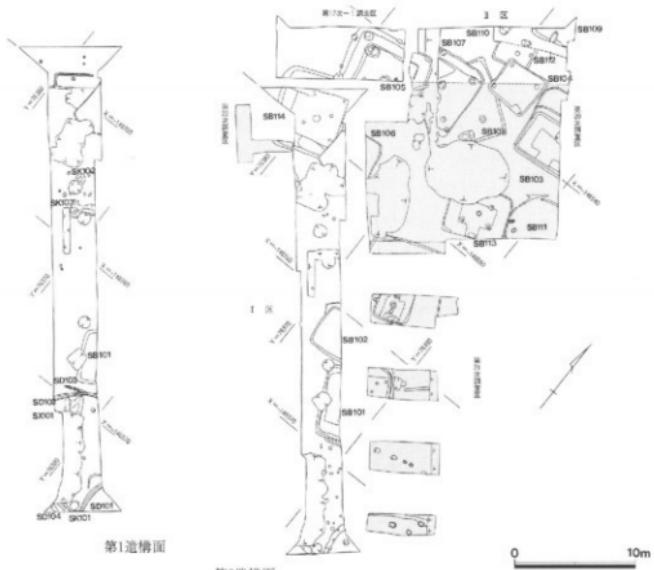


fig.118  
調査区平面図



fig.119 I区 第1道横面全景



fig.120 I区 第2道横面全景

## 18. 兵庫津遺跡 第33次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は兵庫区の南部、現在のJR兵庫駅の南一帯に位置する広大な遺跡である。古くは大輪田泊と呼ばれ、瀬戸内航路の終点として機能し、平安時代には平清盛による港の大改修が行われ、国内有数の港として、また対外貿易の窓口として発展、古代～近世にかけての重要な港として位置付けられる。近世には西国街道の宿場町としての性格も合わせ、都市・兵庫津として発展してきた。近年の発掘調査では各時代の様々な遺構・遺物が確認されており、現在の神戸の街の礎を築いてきたこの遺跡の解明は非常に注目されるところである。

今回の調査は震災復興に伴う寺院の庫裏再建にかかる調査で、兵庫区神明町に所在する日蓮宗法蓮寺の境内において実施した。法蓮寺の寺歴については、戦災などにより史料が滅失しているため明らかではないということだが、いわゆる「元禄兵庫津絵図」には寺域が描かれ、江戸時代前期には現位置に存在していたことが窺い知れる。また現本堂の北側にある墓地内には「應永」銘の刻まれた開祖のものとされる墓石があり、確かであれば室町時代にまで遡れる可能性がある。



fig.121  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

調査は本堂の南側にあった従前の庫裏を解体した後に、まず基礎杭の入る部分の調査を行い、その後、杭の打設、土留め工事の後に本体部分の調査に着手した。

先行調査では4ヶ所にトレーナーを設定した。南西の第1トレーナーでは石列（石積み）と桐木が確認され、溝状の遺構の存在が想定された。南東の第2トレーナーでは湿地状の堆積と熱を受けた疊の出土が見られた。北東の第3トレーナーでは、大型の柱穴底から径0.6mを超す石とその上部で瓦片や砾を含む塗喰状の粘土を検出した。

本体部分の調査は重機により盛土層を除去し、第3・4トレーナーで遺構を確認した現地表下約0.7mの灰褐色砂面から人力により調査を実施した。中世末～明治時代までの3時期の遺構面を確認した。

**第1遺構面** 従前建物の基礎や、墓地の改葬に伴う搅乱がひどく、遺構面の残りは必ずしもよくなかったが、現地表下0.7~0.8mの褐色砂面で礎石列、区画溝、寺域境界に伴う溝、壇状遺構を検出し、南の寺域境界の溝と礎石列の際に位置する区画溝に挟まれた範囲から近世~近代の墓を多数検出した。幕末~明治時代にかけての遺構面と考えられる。

**礎石列** 調査区東半部の北端、現在の本堂に沿う形で柱穴を6基確認した。礎石列としたが、正確には柱を受ける礎石は存在せず、礎石を据える際の地固め、あるいは礎石を除去した後の埋め戻しと考えられる状況の柱穴を検出した。径はいずれも約1.0mを測るが、深さは0.3~0.6mとばらつきがある。人頭大の石を配するもの、底部に大型の石を据え、その上に砂や漆喰状の粘土、瓦片を敷くものもあり、上部の礎石を安定させる構造をとっていたものと考えられる。周囲よりは0.2mほど高くなっている。

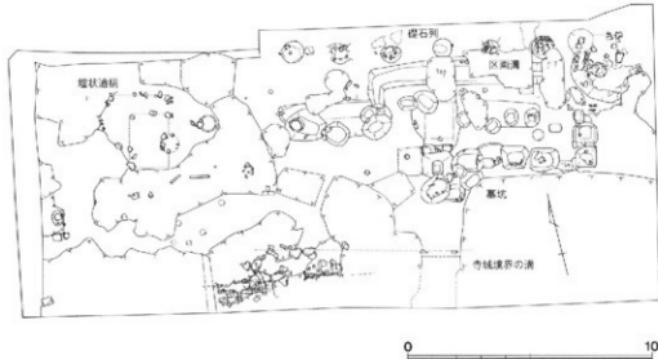


fig.122  
第1遺構面平面図



fig.123 第1遺構面  
(寺域南端境界溝)

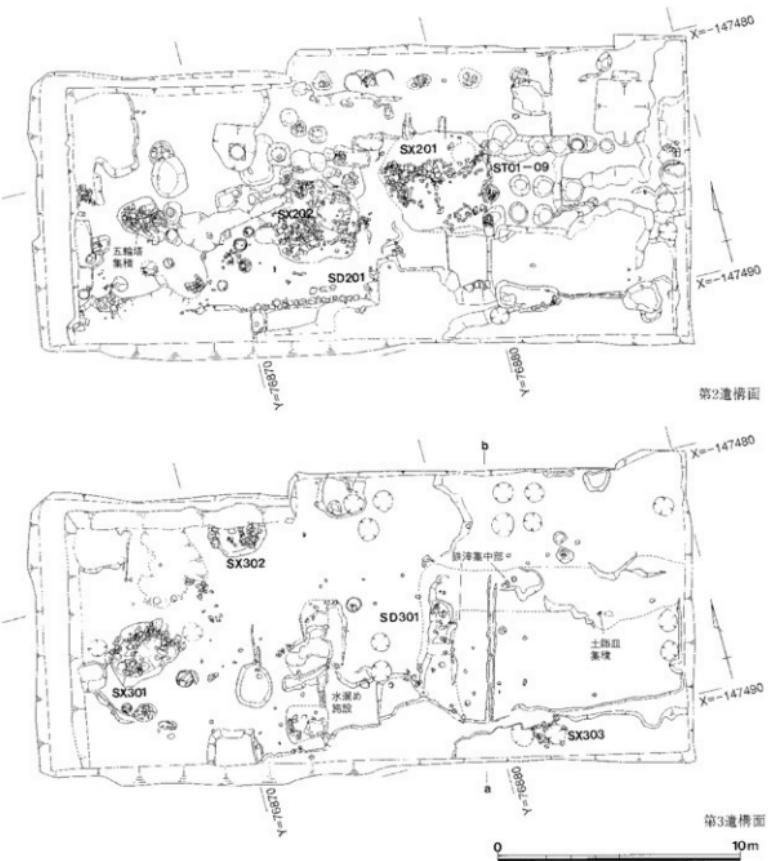


fig.124 第2・3造構面平面図

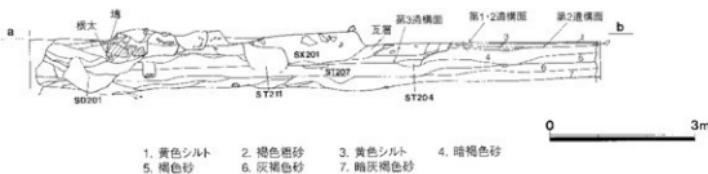


fig.125 調査区断面図

- 区画溝** 磁石列の南側に沿う形で検出した溝で、途中、鍵形に折れ曲がる。幅0.8~1.0mを測るが、深さは約0.1mが遺存していたに過ぎない。埋土は黒褐色シルトの單一層である。陶磁器、瓦片の他、花立て、石仏（水子地蔵尊）、巻貝等が出土した。西側は不明瞭ながら壇状遺構の北側の石列に続くものと思われる。
- 壇状遺構** 東西約3.0m、南北約2.0mの範囲に人頭大の角礫を方形に配したやや不定形な遺構で、0.2mほどではあるが、周囲よりわずかに高くなっている壇状の施設である。礫は疎らで、全体に廻っていたのか、あるいは石垣などの下部構造の割石なのかは判然としなかった。上面に明確な施設はなかったが、中心部から桶棺が出土した。寺に保管される大正時代の図面にはこの位置に「歴代墓」の記述があり、震災までは歴代住職の墓が置かれていたという。近接する擾乱坑には玉垣に用いた石材が多く混入しており、他の墓と比べ厚葬、区別化が図られていた様子が見受けられる。これは検出した桶棺が平面八角形の枠材で囲まれていることからも類推される。
- 寺域境界の溝** 調査区の南辺に沿って検出した溝である。石材を抜き取った擾乱により全体の規模は不明であるが、明治時代には博を敷いた側溝をもつ通路状の区画溝となっており、幕末頃には桐木を据えた2段以上の石積みをもつ溝、第2遺構面（18~19世紀初）の段階では深さ1.4m以上の溝として機能していたと推定される。
- 第1遺構面の段階** では遺物の出土は少ないが、第2遺構面の段階の溝埋土からは陶磁器や瓦片の他、漆椀や箸、下駄などの木製品が多く出土し、石列の裏込めには「慶長十六年」銘のある・石五輪塔などが転用されている。
- 墓** 摆乱により大半を失うが、鍵形の折れ部南東側で骸骨器を主体とする墓群を確認した。大きさは径（一辺）1.0m前後の区画が連続して並ぶが、切り合いも多く、個別の区画、埋葬時期の差などは明確にできなかった。骸骨器は陶製器、土師質のものが混在し、单独で存在するやや古手の火葬骨壺はいずれも土師質の火消し壺の転用である。調査区中央から壇状遺構にかけては大型の丹波の甕を埋葬施設とする墓が築かれ、他の墓との間にやや空間を設けている。
- 第2遺構面** 第1遺構面の土間状の黄色シルトならびにベース土を除去した後の暗褐色砂面で、大型の土坑、落ち込みと墓を検出した。
- S X201** 調査区中央に位置する径4.0mを測る大型の土坑である。大量の瓦の他、漆喰ブロックを多く含み、建築材として用いられたものを投棄した土坑と考えられる。その他に陶磁器など生活雑器の出土もあった。
- S X202** S X201と同様の規模をもつ土坑である。瓦の出土は少なく、陶磁器などの生活雑器の出土の割合が多い。紅白の紙縫りなど宗教色の強い遺物の出土もみた。
- 五輪塔集積遺構** 調査区西端で検出した浅い落ち込みから約20本の五輪塔の出土をみた。南半部の一群は丁寧に揃えて埋納されているが、その他はやや乱雑に置かれた感がある。一寸塔の比率が多く、一寸半、二寸塔は少ない。他に組み合わせ式の五輪塔の「火・水輪」の部位が1基出土した。
- 墓** 第1遺構面に比べ整然と並ぶ感がある。基本的には径1.0mの掘形をもつ埋葬施設で、東側の一群は桶棺、西側の一群は甕棺を基本とする。

S X 201・202が埋まつた段階以降に築かれた墓群の他に、整地前のものと考えられる墓が投棄土坑の下層で確認されている。南側はS D 201により区画され、北側の本堂下層には埋葬施設が拡がらないことから、第1造構面と基本的に同じ配置で建物と墓地が存在していたものと考えられる。



fig.126 第2造構面全景



fig.127 穂棺と甕棺



fig.128 甕棺



fig.129 五輪塔集積遺構



fig.130 墓坑

- 第3遺構面 溝水が激しく十分な調査が行えなかったが、集石土坑3基、溝を1条検出した。
- S X301 第2遺構面で検出した五輪塔集積遺構の下位に位置するが、調査区全体に堆積する灰色砂を間に挟むため上層遺構とは異なるものと判断される。平面形は長径3.0m、短径2.0mの橢円形を呈し、深さは0.6mを測る。人頭大の礫を周囲に配する。遺物の多くは瓦片であるが、その他に備前の甕片や擂鉢が出土している。
- S X302 調査区北側に折るため全体の規模は明らかでないが、径約2.4mを測る円形の土坑である。S X301と同様、礫を配し、内部からは建築部材と考えられる加工木が出土している。
- S D301 調査区東半部に位置する幅1~1.5mの南北方向の溝で、北端から不明瞭ながら東へL字状に折れ曲がる。重ねられた11枚の土師皿の他、焼石や鉄滓、輪の羽口などが出土している。またL字に囲まれた内部、調査区の南壁際では焼石を集積した遺構であるS X303を検出しており、ここからも鉄滓、羽口の出土を見た。これらの遺構は鍛冶に伴う可能性があるが、遺構面上では特に防湿効果などが図られた痕跡は確認されておらず、その用途については明らかでない。
- 3. まとめ** 今回の調査では検出遺構の多くが墓地に伴うものであったが、近世寺院の姿を垣間見る資料を得ることができた。埋葬施設を面的に把握することは困難であったが、大略、中世末の寺院創建前階の様相、江戸時代中期の墓地の改修、幕末から明治時代の境内の様相が把握できたものと考える。江戸時代中期には建物の解体を含めた改修が行われたようで、以後の埋葬施設の増加は寺院に葬られる人々がより多くなり、階層社会に変化があったことを推測させる。
- また中世の遺構がわずかに確認されたが、集落域に属する明確な遺構ではなく、地形的に高位となる北側の安定した砂帶上に集落域が展開するものと推測される。



fig.131  
調査地遠景

## 1. はじめに

攝津国雄伴郡（八部郡）に所在する大輪田泊、後の兵庫津は奈良時代に主要な港湾とされた五泊のひとつとしてその名があがり、古くから瀬戸内航路の主要港として栄えた。

近年の発掘調査で、古代から近世に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。第32次調査において奈良時代の港湾施設の可能性が推測される遺構が確認され、古代の大輪田泊閑連遺構の発見として注目されるが、中世以前の遺構の確認はいまだ少ない。これに対して戦国時代から江戸時代にかけての遺跡は質量ともに著しいものがある。

近世の兵庫津はたびたびの火災に遭い、その都度、町の復興がなされる。その結果、遺跡としては幾枚もの生活面が確認され、町割り・生活用具などさまざまな要素の具体的な変遷を細かい時代単位で追えるという重要な成果が得られている。



## 2. 調査の概要

今回の発掘調査は、不明な点が多い兵庫津遺跡における中世以前の状況について確認することを目的として行った。調査地は兵庫津の中心である本町、南北行する西国街道に西面する地点である。

調査の結果、5枚の遺構面を検出・調査した。うち江戸時代の遺構面は2枚を確認し町屋関連の遺構が検出された。遺構の遺存状況も良好である。今回の調査の目的から、これらの面についての調査も必要最小限に止めた。第1遺構面上面50m<sup>2</sup>、同下面・第2遺構面が半分の25m<sup>2</sup>である。第2遺構面においても埴物礎石等が確認されたため、これ以下については防空壕によって第2遺構面までが破壊されている約2m<sup>2</sup>についてのみ順次確認調査を行った。

その結果、戦国時代の第3遺構面、室町時代の可能性が高い第4遺構面、室町時代の第5遺構面が確認された。第5遺構面において建物に伴う地業跡と推定される遺構が確認されたため、これ以下の掘り下げは行わなかった。それぞれの標高は以下の通りである。

|        |          |          |
|--------|----------|----------|
| 現地表    | (1a層上面)  | : 約3.2m  |
| 第1遺構面上 | (3a層上面)  | : 約2.5m  |
| 第1遺構面下 | (3a層下面)  | : 約2.75m |
| 第2遺構面上 | (4a層上面)  | : 約2.1m  |
| 第3遺構面  | (11a層下面) | : 約1.7m  |
| 第4遺構面  | (12a層下面) | : 約1.5m  |
| 第5遺構面  | (13a層下面) | : 約1.4m  |

**第1遺構面(上)** 土間3a層の上面で検出される江戸時代の町屋関連の遺構面である。西国街道に面する町屋と考えられる。南北トレーンでは、町屋間を区画する溝(S D01・02)が確認された。区画溝沿いには石列が存在する。両者の間隔は、たゞ間で約6.0mをはかり、この幅が町屋軒の間口となる。礎石なども確認できるが、遺構のはほとんどは炭・焼土まじりの瓦等を投棄する土坑である。プランは円形のもの、長方形のものなど大小さまざまである。多くは罹災後の片付けのためのゴミ穴であろう。

**第1遺構面(下)** 土間3a層の下面で、ゴミ穴と考えられる土坑が多数検出された。当然だが区画溝に重なるものはほとんどない。

**第2遺構面(上)** 土間4a層の上面で検出される江戸時代の町屋関連の遺構面である。第1遺構面と重なる位置で同様の区画溝、他に礎石・土坑が検出された。

**第3遺構面** 第3遺構面以下は防空壕部分のみの調査となったため、ここでいう第2遺構面と第3遺構面との間にさらに遺構面の存在する可能性がある。

第3遺構面は11a-1層下面で検出された。11a-1層下位からは多くの陶磁器・瓦が出土し、その下面が火を受ける焼土面となる。出土遺物から戦国時代の遺構面と推定される。

**第4遺構面** 12a層下面で検出された。砂地のベースに粘土を貼り土間とする。粘土貼り床の北限が確認でき、このラインが上層の町割りのそれと一致する。この粘土面を切り込むかたちで柱穴2が検出された。この柱穴を結ぶラインも同様に上層のラインと一致する。

**第5遺構面** 13a層で検出された。砂地の表土に拳大から人頭大の礎が埋め込まれる。類例から地盤の軟弱なところで倉庫等の重量のかかる建築物を建設する際に行われる基礎工事、地盤跡と考えられる。礎の間には瓦・陶磁器が含まれ、これらの年代から室町時代の遺構と推定される。これはその南限が確認され、やはり同様に上層の町割りと一致することが確認できた。



fig.133 調査区断面図

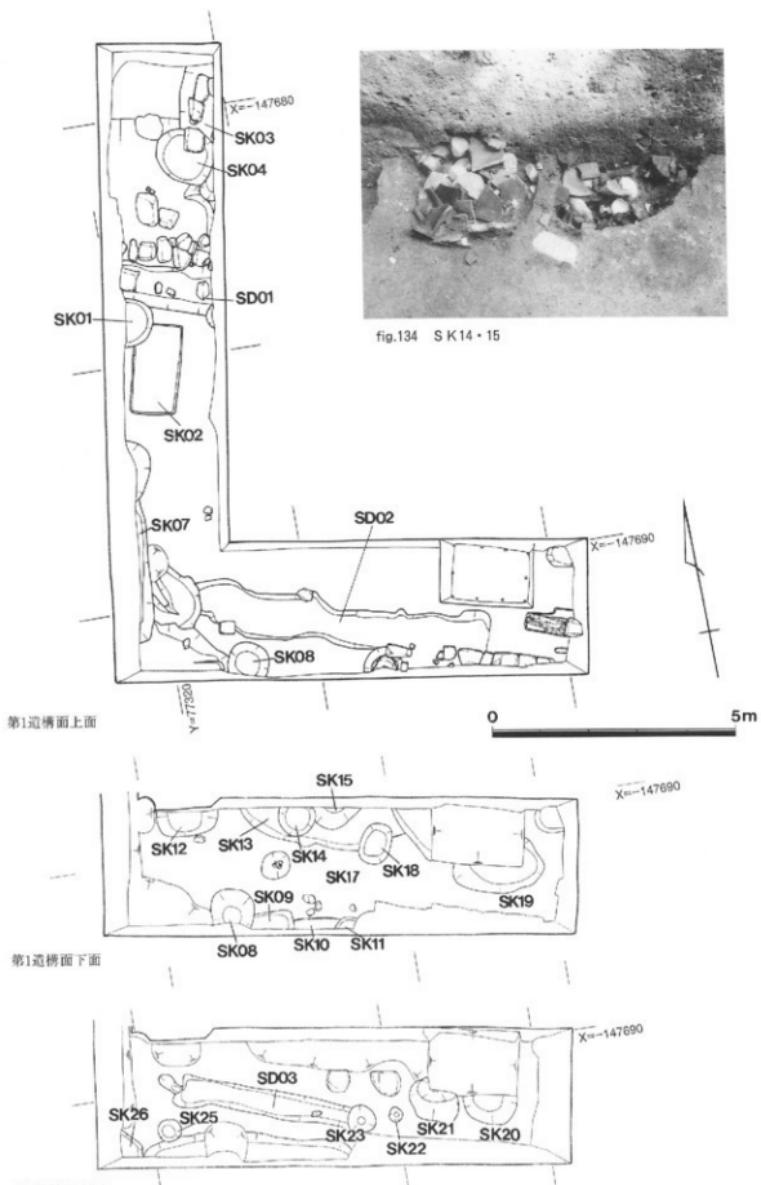


fig.135 調査区平面図

第5造構面以下 第5造構面の遺構を保護するため、これ以下の掘削は行わなかった。しかし遺物としては平安時代に遡る土器類が出土している。

3. まとめ 江戸時代の造構については、通常兵庫津内の町屋の調査では、多数検出される胎衣壺が存在しないことが注意される。屋敷地の端の部分しか土間層の下面を調査しなかったがため、単に見つからなかっただけなのか、あるいは商家のなかでも住居部分ではないため埋められることがなかったのか、今回の調査からだけでは判断できない。今後の調査事例の増加を待ちたい。

第1造構面 S D02の方向は座標北に対して西-16度-北である。従ってこれに直交する西国街道の方向は北-16度-東ということになる。この方位は第5造構面までの

すべての造構でほぼ一致しており、当地における町割りが少なくとも第5造構面に対応する室町時代まさかのぼり、この町割りが現在まで踏襲されていることを確認できた。

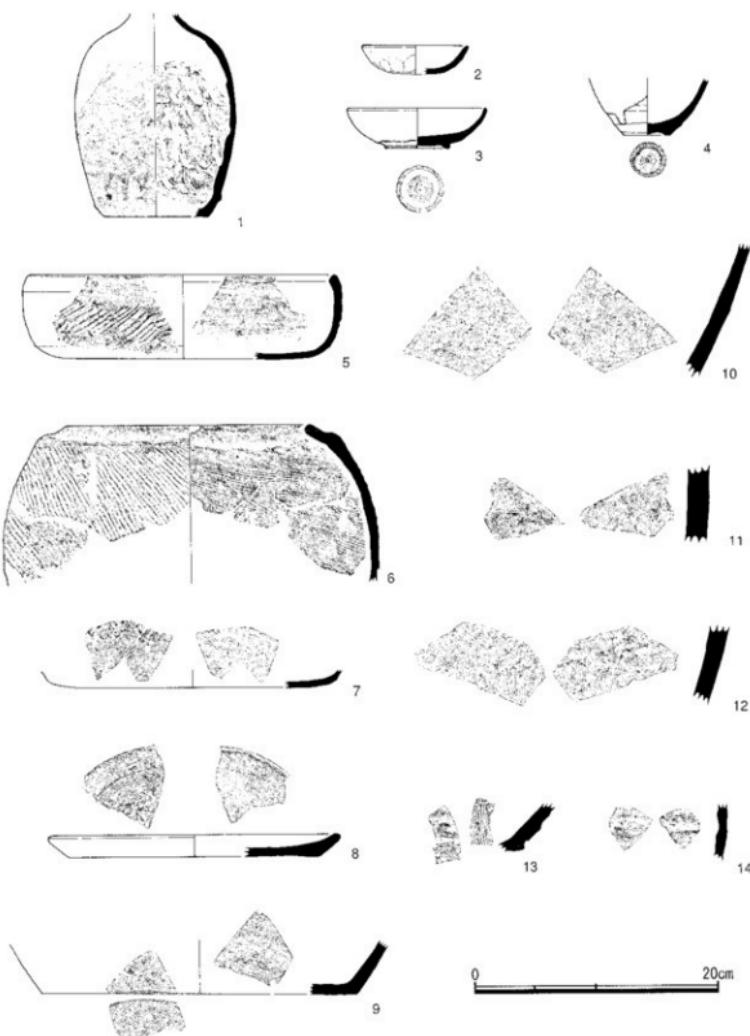
平安時代の遺物が出土していることから第5造構面の下層にはより古い造構面の存在することを想定してよいだろう。今後の調査によりこれ以前の状況が明らかになるだろう。



fig.136 第2造構面全景

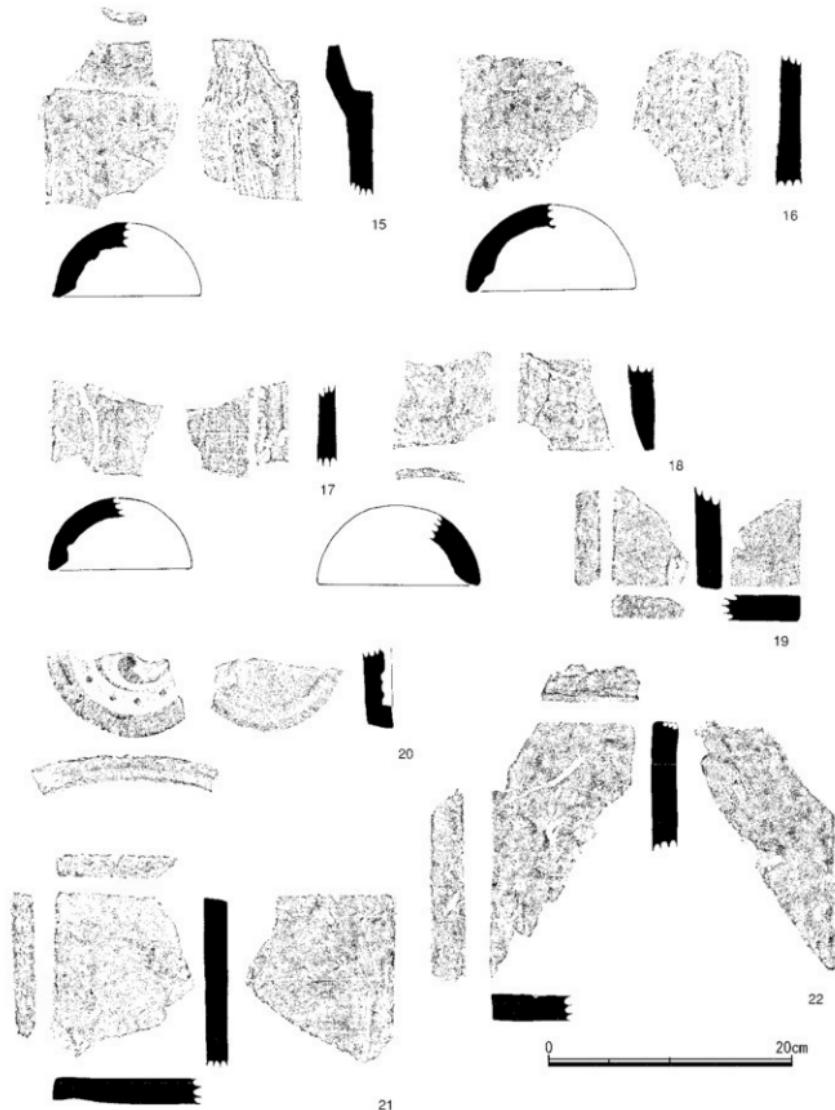


fig.137 第1造構面全景



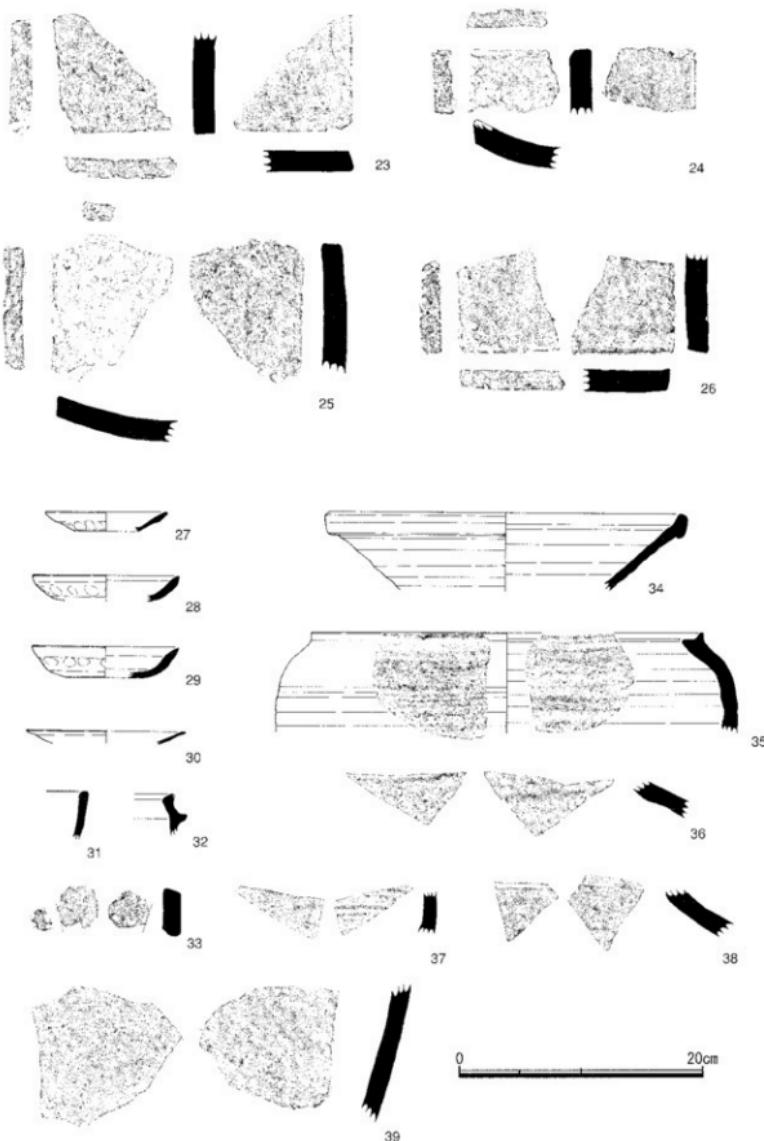
SX04（第3遺構面を覆う火災層）出土【1：船載鉄舶器、2・5～8：土師器、3：瀬戸焼、4：唐津焼、9：丹波焼か、10～14：備前焼】

fig.138 出土遺物実測図（1）



SX04（第3遺構面を覆う火災層）出土〔瓦〕

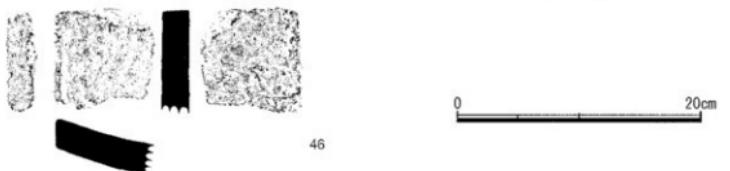
fig.139 出土遺物実測図（2）



23~26 : SX04 (第3遺構面を覆う火災層) 出土 [瓦]

27~39 : SX08 出土 [27~32:土師器、33:瓦転用円盤、34:須恵器、35・37・39:備前焼、36・38:丹波焼]

fig.140 出土遺物実測図 (3)



0 20cm

40~46 : SX08 出土〔瓦〕

fig.141 出土遺物実測図 (4)

## 20. 石峯寺坊跡 第1次調査

### 1. はじめに

真言宗岩巖山石峯寺は、白雉二（651）年法道上人の開基と伝えられる古刹で、修験道場として大いに栄えた。境内には重要文化財に指定される室町時代中期の三重塔および同後期の薬師堂、地蔵菩薩像を安置した本堂、鐘楼・弁財天社などがある。本堂裏の山林には四国八十八所のミニチュア靈場がある。後山の竜ヶ峯山頂の経塚から銅経筒1口、経巻6巻、和鏡3面（瑞花鸞鷲八稜鏡、瓜双雀鏡、松喰鶴鏡）が出土している。経巻のうち、朱書法華經には永久五（1117）年の奥書きがある。他の地点からも瓜蝶鳥刻文壺・鍛金経筒・瓦製五輪塔などの出土があり、複数の経塚が存在するものと考えられる。

かつては境内から山門までの250mにわたり参道の両側に七十二とも伝えられる多くの僧坊や塔頭が存在していた。現在塔頭として残るものは竹林寺と十輪院のみであるが、廃絶した坊の敷地がそのまま水田となっており、不動坊などかつての坊名がそれぞれの水田名として残されている。今回の調査地は岩本坊である。

今回の調査は地滑りによる棚田のがけ崩れに対応するものである。崩落面に遺構が確認され、崩落土から中世の遺物が採取されたため、遺物の回収・現況の記録作成、復旧にともなう遺跡の破壊が予想される範囲について応急調査という対応を行った。



fig.142  
調査地位位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

調査地の南面は現状で溜池となっている。崩落した崖面にみえる土層はほぼすべてが盛り土であることが確認され、調査地点も本来は谷に続く窪地であり、これを埋め立てて岩本坊の敷地を造成あるいは拡張したことが確認された。

崖面の東寄りに3.6m以上、おそらく4m程度の幅でこの盛り土をコ字形に掘り込む部分がある（SX03）。奥行きは2.5m以上あることを確認できた。崩落のため遺存状況は極めて悪いが、底面に自然石の礫石1個がほぼ原位置に遺存しているのが確認できた。

この掘り込みの壁面・底面には火災による顯著な赤変が認められた。礫石も火災時に露

出していた部分は焼け焦げ、地中部分は変色等がない。この掘り込みには炭化材また焦土が堆積し、この中からは赤変した土壁あるいは寺の什器等が焼け焦げた状態で出土している。土壁はスサあるいは小舞などの痕跡が明瞭に残る。出土遺物は平安時代末にさかのぼるものもみられるが主体は室町時代はじめころのもので、この期間に寺の什器となったものが火災によって焼け落ちたものと推測される。大小の違いはあるが、瀬戸焼盤は少なくとも5枚以上同種のものがあることを確認しており、寺の什器として食器が一揃いのセットとして保管されていた状況を推測できる。

火災後、S X03は盛り土によって埋め立てられる。これにより、火災以前、より小さな区画での段造成による土地利用が行われていたものが、より大きな区画へ拡張され、江戸時代の岩本坊へと続くものと考えられる。

埋め立て拡張後の造構面に対応する表土層からは、近世までの遺物、瓦・陶磁器・雁首錢などが出土している。

**3. まとめ** 石峯寺における初めての発掘となる今回の調査は、地滑りによる遺跡崩壊に対応する小面積のものであり、造構としては目立ったものは確認されなかった。しかし、出土遺物には白磁四耳壺や景德鎮窯系白磁碗などの一級品をはじめとして多くのものがあり、寺の隆盛を改めて確認することができた。

市沢哲氏（「南北朝期から根拠平家勢力圈を考える—石峯寺の調査からみえてきたこと—」新修神戸市史中間報告講演会2006.11.26.）によれば南北朝期に石峯寺は新田氏配下金谷経氏の拠点となつたが、暦応二（1339）年に島津忠輝の攻撃により破却されたという（八月二九日 島津忠輝軍忠状）。

現存する石峯寺最古の建築物である三重塔は15世紀後半の建立と推定されている。島津忠輝軍忠状の記載、そして石峯寺における15世紀中葉以前の建築の不存在などを考え合わせ、今回確認された室町時代初め（14世紀中頃）の火災は、市沢氏の指摘されるように暦応二（1339）年の合戦に原因するものである可能性が高いと思われる。

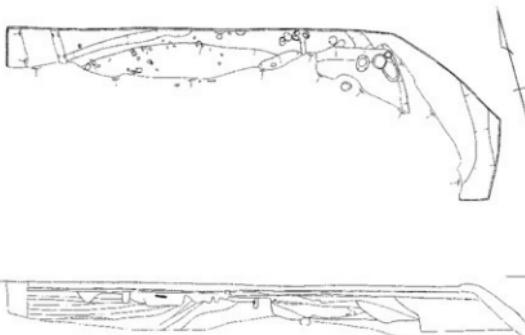


fig.143  
調査区平面図・断面図



fig.144  
調査区全景



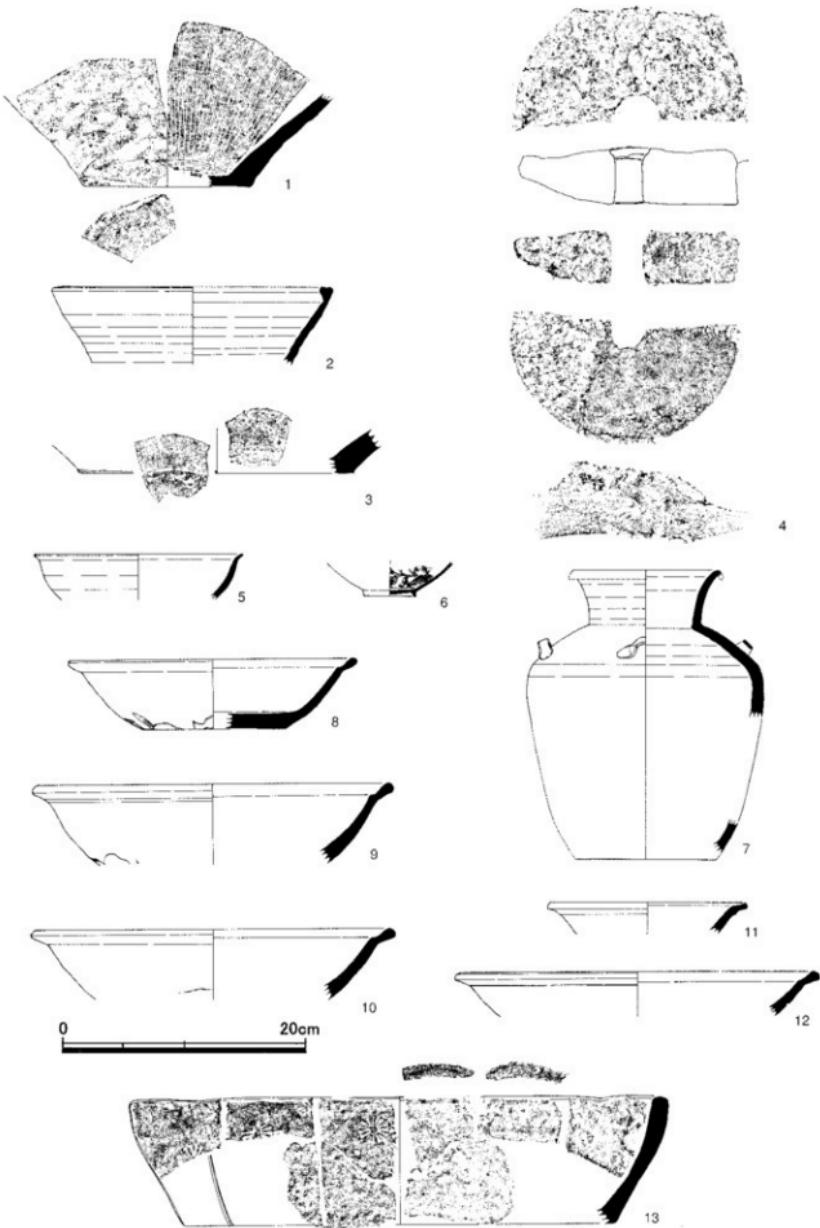
fig.145 S X03



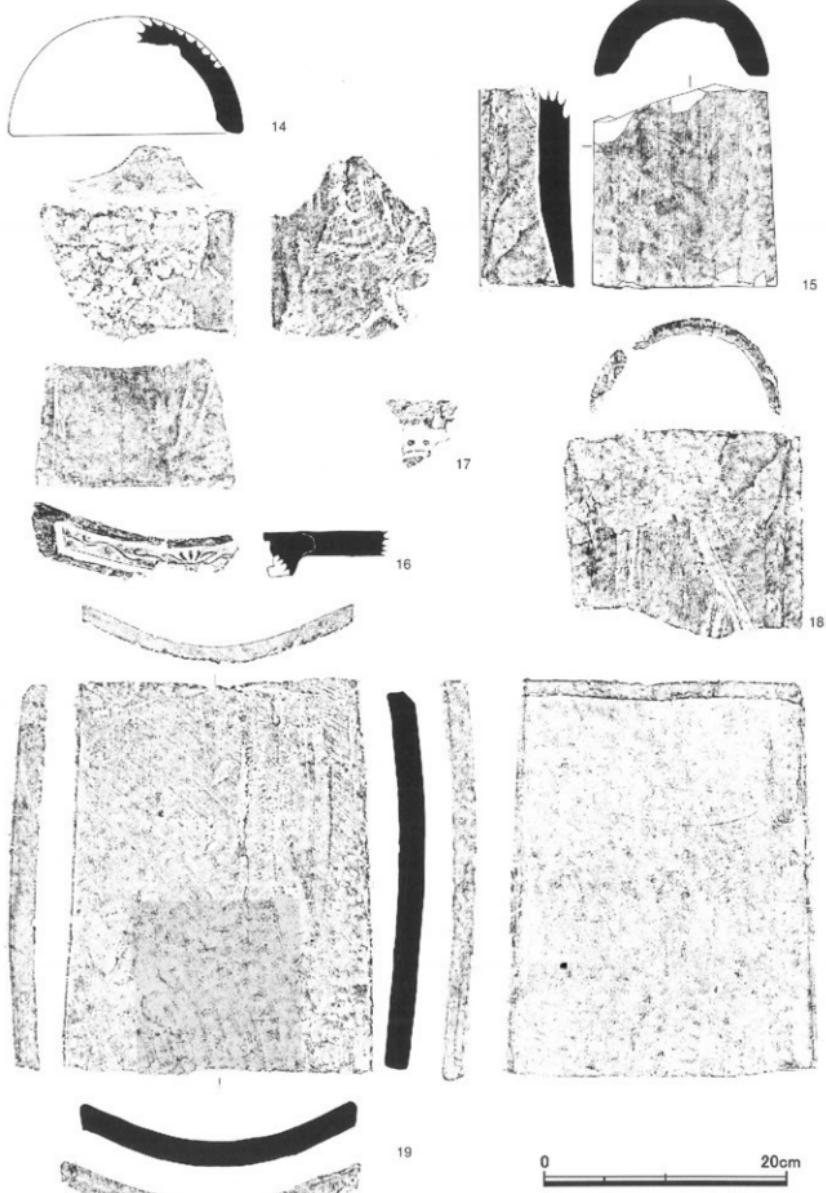
fig.146 磁石



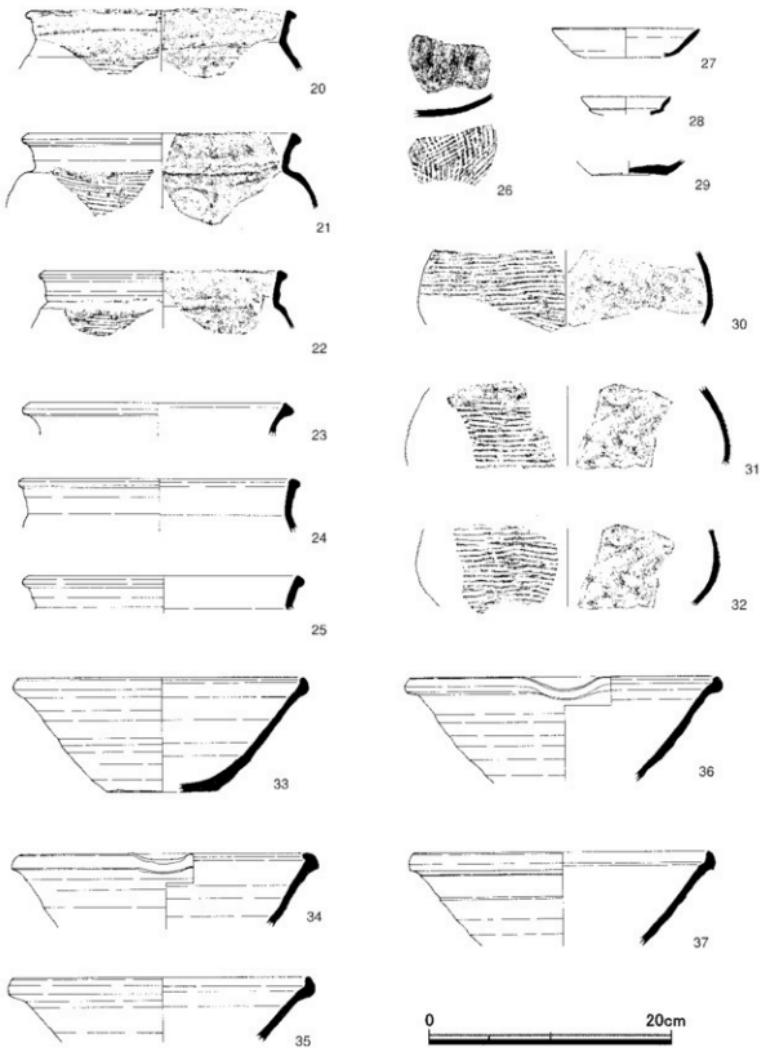
fig.147 S X03を覆う火災屑



1~5 : 2a層、6~13 : 崩落土（炭が多く付着するものが多く、14世紀の火災層=SX03中のものが主体）  
出土 [1~3 : 丹波焼、4 : 石臼、5 : 梶府系白磁、6 : 景徳鎮系白磁、7 : 白磁、8~12 : 濑戸焼、13 : 奈良火鉢]

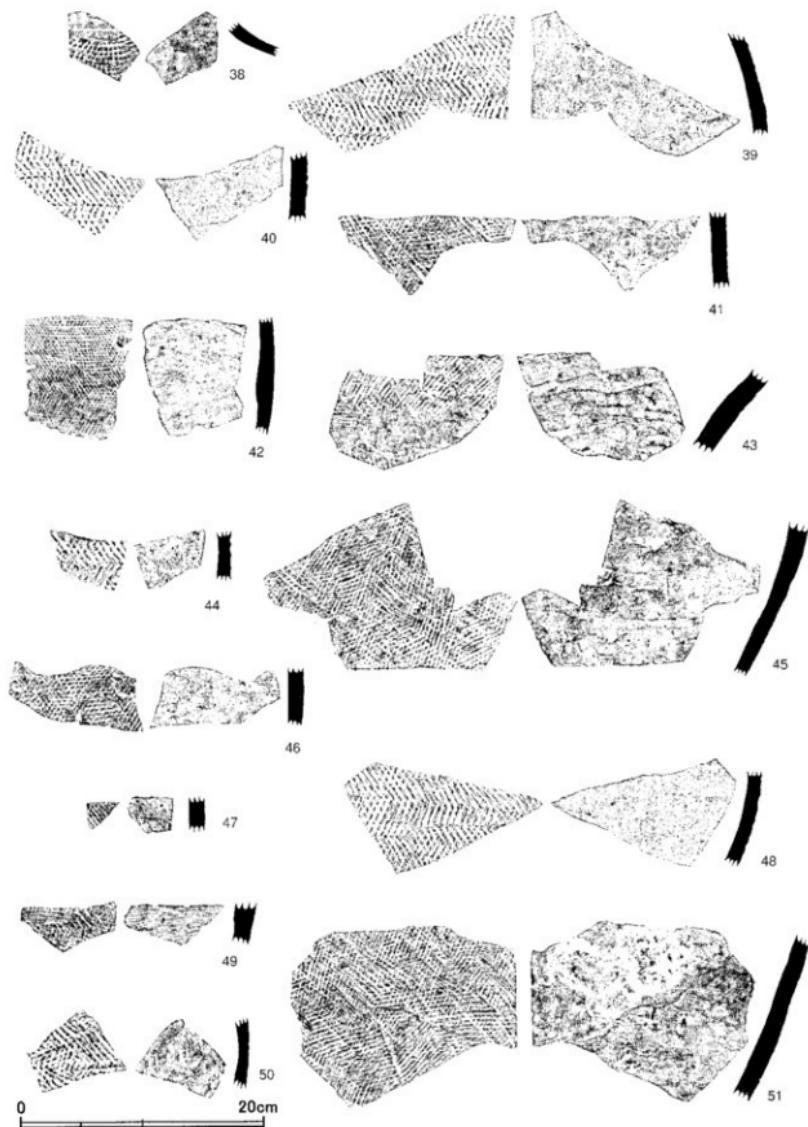


14～18:2a層、19:SX06(2a層が表土となる土地造成の際の盛り土)出土〔瓦、19の網点部分には赤彩が残る〕  
fig.149 出土遺物実測図(2)



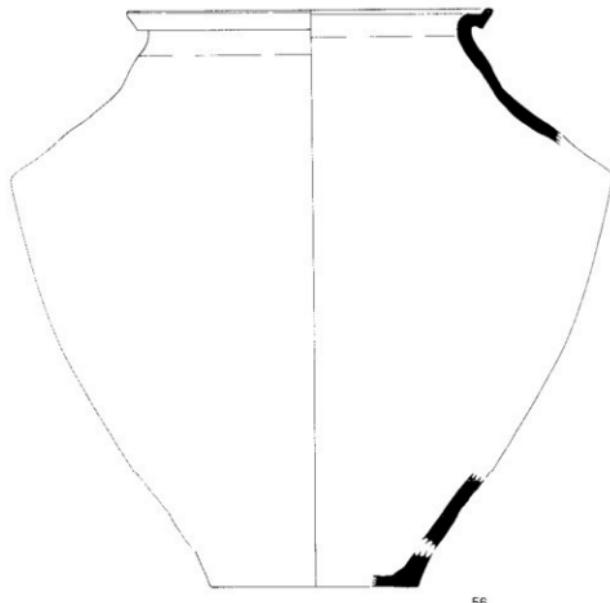
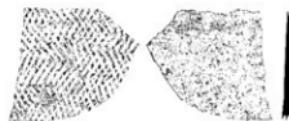
20~28・30~34・37:崩落土、29・35・36: SX03 出土 [20~28・30~32:土師器、29・33~37:須恵器]

fig.150 出土遺物実測図 (3)



38・42・47・50:2a層、40・51:SX03、その他:SX01 出土(須恵器)

fig.151 出土遺物実測図 (4)



52~56:SX01 出土 [52~55:須恵器、56:丹波焼(三本峠窯)]

fig.152 出土遺物実測図 (5)

## 21. 淡河城跡 第3次調査

### 1. はじめに

淡河城は、国道428号線と県道三木・三田線が交差する淡河町本町を見下ろす河岸段丘上に位置する。古くから淡河氏の居城として知られているが、本格的な発掘調査ではなく、城の構造や築造時期の詳細については不明な点が多い。昭和51年度に圃場整備事業に伴う発掘調査が本丸の南側で実施されたが、淡河城に係わる遺構は確認されなかった。圃場整備が実施された後、本丸・二の丸を除き旧形状は損なわれた。

淡河町では、人と自然の共生ゾーン指定に関する条例に基づき、淡河町内で里作り協議会が設立され、淡河城の保全と活用を通して町の活性化を行なう里作り計画が策定されている。この計画を受け、城跡の保護及び活用の資料を得る目的で範囲確認調査を実施した。



### 2. 調査の概要

今年度は、本丸において遺構の残存状況及び遺構の分布状況の確認を目的として、本丸のほぼ中央に Tr.1 ~ 3 の 3 本のトレンチを設定して、調査を実施した。なお、検出した遺構については、上面検出のみに終わっている。

#### Tr.1

Tr.1 は中央に設定したトレンチである。厚さ30cm前後の耕作土を除去すると、南から中央にかけては黄褐色含隕シルト（基盤層）を、北では灰茶褐色シルトを検出した。遺構は北側の灰茶褐色シルトの上面で検出した。なお、灰茶褐色シルトに



は土師器・須恵器が出土しており、整地層と考えられる。

遺構は、水溜1基・ピット2基、土坑1基である。水溜は長径1.6m、短径1.4mを測る。また遺構の縁辺には直径10cm前後の礫が蓄積する状況が確認できる。備前焼の擂鉢・土師器片が出土した。ピットは炭を多く含むものと、直径5~10cmの礫を多く含むものがある。後者から土師器の擂鉢が出土した。

Tr. 2 Tr. 2は東側に設定したトレンチである。厚さ30cm程度の耕作土を除去すると、中央~北にかけて耕作土灰褐色シルトが均一に堆積しており、整地層の可能性が高い。整地層の存在しない部分には幅20cmの東西方向・南北方向の溝が検出された。遺物が出土しておらず、城に伴うものか不明である。また、直径30cm程度のピットも2基検出した。

Tr. 3 Tr. 3は、東側に設定したトレンチである。厚さ30cm程度の耕作土を除去すると、全面で黄褐色含礫シルト(基盤層)を検出した。この上面で精査を行ない、北半部分で幅60~90cmの溝とピット1基を検出した。遺構からは遺物が出土せず時期は不明である。

3. まとめ 今回の調査では、すべてのトレンチで遺構・遺物を検出した。特にTr. 1では北端で水溜やピット、Tr. 2・3北半でもピット・溝などの居住施設に関係する遺構を検出した。しかし、土壘に近いTr. 1・3の南側では一切遺構は検出されなかった。

耕作による削平を考慮に入れる必要もあるが、調査の結果、建物は本丸の中央~北側および東端部分に存在したものと考えられる。また、遺構には切り合いがあり、複数時期の遺構が存在すると考えられる。遺構の基盤層から鎌倉時代の須恵器が出土しており、淡河城創建当時の遺構が残存する可能性が高い。一方、調査地南側で遺構が検出されなかっことから、土壘と建物の間には広場状の空間が存在したことが想定できる。

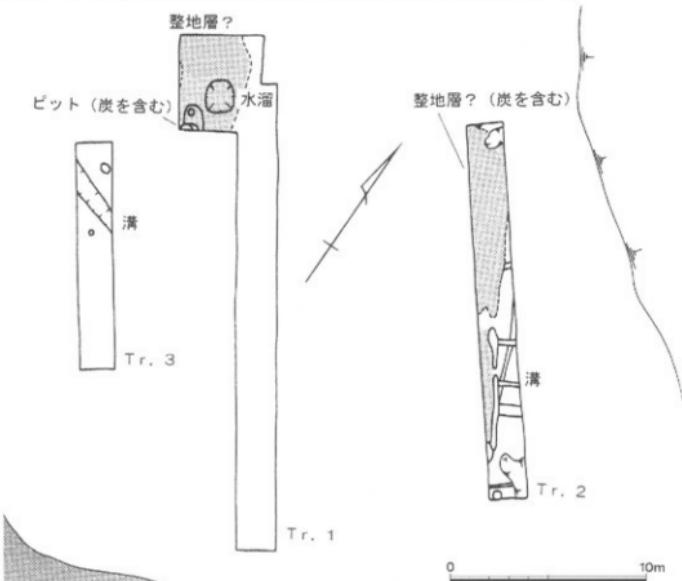


fig.155 調査区平面図

## 1. はじめに

小部北ノ谷遺跡は、平成2年度に都市計画道路長田箕谷線の築造に伴いはじめて発掘調査が実施された遺跡である。

遺跡は丘陵の谷部を流れる西小部川によって形成された小段丘上に立地しており、今回の調査地はその東岸部にある。現標高は約300mを測る。

これまでの発掘調査から、遺跡は縄文時代中期に遡ることが明らかになっているが、遺跡は鎌倉時代を中心としており、以後近世までの遺構・遺物が確認されている。

fig.156  
調査位置図  
1:2,500



## 2. 調査の概要

内田家住宅では平成15年度に土間部分や下屋柱部分にトレンチを設定して、保存修理事業で影響を受けると考えられる部分について発掘調査を、さらに平成16年度は、内田家住宅の保存修理工事の進捗に伴い、防火水槽とポンプ室が設置されるため掘削が行われる部分と、雨落ち溝の整備に伴って影響を受ける部分について発掘調査を実施したものである。

**平成15年度調査** 平成15年度の発掘調査は、工事に伴い影響が及ぶ可能性が考えられる

土間部分と下屋部分にトレンチを4本設定して調査を実施した。あわせて、内田家住宅の前身建物の可能性が追求できる部分にトレンチを2本設定して調査した。

**土間トレンチ** 土間部分では、ウマヤ部分の一段下がった部分以外について全面調査を実施した。

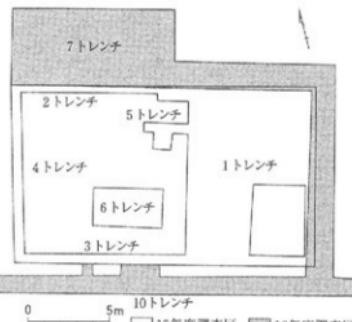


fig.157 トレンチ配図

調査の結果、土間では礎石の抜き取り痕跡や土間のタタキ痕跡、カマドの痕跡など多くの遺構を確認することができた。

土間のタタキは、旧表土面の上に1回とその2~3cm上面に1回の計2回のタタキ面を確認した。タタキに伴う整地層は南側で厚く北側で薄くなっていた。

カマドは解体前に築かれていたレンガ積みのカマドの下層に、5基のカマドの痕跡を確認することができた。建物解体前まで遺存していたレンガ積みのカマドをⅦ期として、Ⅰ期~Ⅴ期(古いものから新しいものへ)として以下報告する。

土間の最も西側、座敷近くで確認されたカマドが当初のカマド(Ⅰ期)である。このカマドはⅡ期のカマドを築く際に埋め戻されていたものである。長辺3.2m、短辺1.8mの短辺の丸い長方形形状を呈する深さ0.2mの浅い落ち込みの中に、カマドの焚き口を弓なりに5口築くものであった。焚き口は西側(座敷方向)へ向かって開口している。遺物は全く出土していない。

Ⅱ期のカマドもⅠ期のカマドとほぼ同様の形態をもつもので、Ⅰ期のすぐ東側で検出された。ただし、南辺が後世の貯蔵穴によって削られているため長辺の長さが不明確になっている。推定長2.7m、短辺1.5m、深さ0.1~0.15mで、全体的にⅠ期のものよりも一回り小型のカマドになっている。しかし、焚き口は5口を弓なりに配しており、ほぼ同形態の

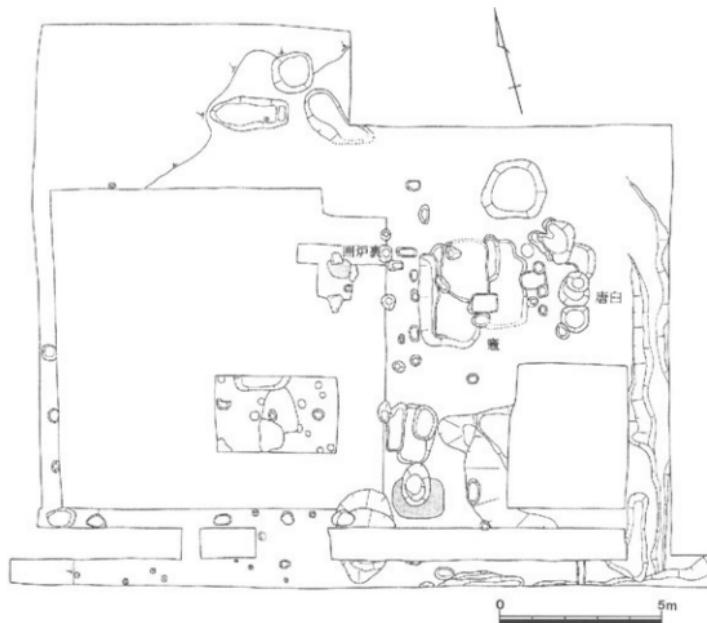


fig.158 調査区平面図

ものである。イタノマに広縁を設けたことによって、東側へ平行移動を余儀なくされた結果ではないかと考えられ、広縁が当初の姿でないことを合致する成果といえる。また、この5口の焚き口の被熱痕跡はI期のものと比較すると弱いもので、使用時間としてはI期のものよりも短かったことがうかがわれる。

III期以降のカマドは、I・II期のものと形態が大きく変化している。これ以後のカマドはすべて焚き口が2口になり、I・II期のような土坑状の落ち込みは伴わないようになっている（ただし、III期のカマドは遺存状態が悪いため、2口と断定することはできていない）。また、焚口はI・II期が西側へ開口していたのに対して、これ以後は東側を開口部とするようになっている。これは、イタノマから広縁そしてカマドへ一連のものとして機能していたことから、台所機能としてのカマドが分離された結果によるものと考えられる。そして、これ以後カマドは更に北東方向へ移動することになり、土間を空間としてより機能的に使用しようとする意図がみてとれるのである。

ウマヤ部分は、昭和40年頃に床張りの部屋に改造しているが、それ以前はやや南北に長いウマヤであったことが調査の結果判明した。当初、現状の南北方向にやや長いウマヤにはあまり改造は加えられていないものと考えられていた。しかし、発掘調査の結果、現在よりも約1m西側に広かったものを埋め戻し、北側に約1m拡張する改造を施していたことが明らかになった。

**第1トレンチ** 北側の下屋部分に設定したトレンチである。工事影響範囲に限定したため、西側部分で地表面が検出されなかった部分の深掘り調査は実施していない。

このトレンチで検出された遺構は、直径約1.1m、深さ約0.5mの円形土坑が1基ある。時期については、明確にすることはできなかった。また、小ピットが1基確認され、埋土から中世の土師器の小皿が出土している。

**第2トレンチ** ウマヤの東側に設定したトレンチである。ウマヤを部屋に改造する際に大きく改変を受けていたことが判明した。

**第3トレンチ** カミノマ・シモノマの南側の下屋部分に設定したトレンチである。



fig.159 I期カマド

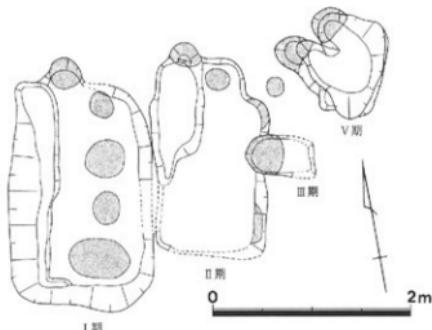


fig.160 カマド平面図

表土層を除いた段階で、地山面が検出され、一部にその上層に精良な白色粘土が貼り土され、化粧土として機能していたことがわかる。東端部で、五右衛門風呂の排水溝が確認されたが、それに重複して便所用の穴を確認することができた。このトレンチでは、後世の大きな改変状況を確認することはできなかった。

内田家以前の遺構と考えられる小ピットが数基検出されたが、遺物は出土しなかった。

**第4 トレンチ** ナンドとカミノマの西側に設定したトレンチである。後世の改変が著しく、明確な遺構なども確認することができなかった。このトレンチでは地山面を確認することはできず、すべて、内田家を建築する際の整地土ではないかと推定される。

**第5 トレンチ** シモノマ下部を中心としたトレンチで、全身遺構の検出に努めた。表土層を除去すると遺構面（地山面）が確認され、十坑や小ピットなど多くの遺構を検出することができた。遺構の中には、時期を明確にすることはできなかったが、上師器や須恵器の小片が出土するものがあり、鎌倉時代から室町時代の遺構であると考えられる。内田家の前身建物などに関連するような礎石抜き取り穴などは確認できなかった。

**第6 トレンチ** 試掘調査で明確にできなかった大黒柱回りの地鎮遺構や、前身遺構の検出を目的としたトレンチである。今回の調査でも地鎮遺構や前身遺構に関連する遺構は確認できなかった。

**平成16年度調査** 平成16年度の調査は、防火水槽部分（第7トレンチ）、北側雨落ち溝部分（第8トレンチ）、東側雨落ち溝部分（第9トレンチ）、南側雨落ち溝部分（第10トレンチ）として、実施した。なお、西側雨落ち溝については、遺物包含層が工事影響深度よりも下層になるため調査はしていない。

**第7 トレンチ** 主屋北西部のかつて蔵が存在していた場所である。調査区の西側部分は、地山面が西側へ向かって急激に傾斜していくため、地山面（遺構面）を検出することはできなかった。しかし、東半部では、若干の整地土層を除去した段階で地山面を検出し、地山上面で遺構を確認することができた。

検出された遺構は上坑が3基である。いずれの遺構からも、出土した遺物は少なかった。しかし、わずかに出土した遺物の中には近世の磁器の小片が含まれていた。詳細な時期については明確にすることはできなかったが、内田家建築以後の遺構である可能性が高いものと推定される。

西側の地山の傾斜する部分では、上層に東側の地山（軟質の岩盤）を削って埋め立てたような整地上層が確認された。この上層中には、遺物はほとんど含まれていなかった。約1m掘り下げた土層から、近世の陶磁器類が出土するようになる。この土層に含まれている遺物には、陶磁器類などが少量含まれていた。出土した遺物は、時期的には概ね18世紀前半段階と考えられるものが主体であった。

**第8 トレンチ** 調査区のほぼ中央部で、昨年の上間部分の調査で確認されていた土坑の北側部分が確認された。直徑約2mの不整形の土坑で、流しの直下にあたることから、流しの水溜めに関する遺構と判断される。

このトレンチの西端部では、腐食土層直下には凝灰質砂岩の岩盤が確認された。この付近から北東方向には、遺構は広がらない可能性が高いものと考えられ、小部北ノ谷遺跡の広がりを考える上でも重要な成果である。

**第9トレンチ** 主屋東側の南北方向のトレントであるが、北から南へ延びる溝を1条確認することができた。最大幅で1mを測る。トレント中央部やや南からは、幅0.5mの溝になっているが、細くなる付近で東へ本流は方向を変えているのではないかと考えられ、狭い溝はその一部であると考えられる。

南端部で長軸2.7mの土坑を1基確認した。性格は不明であるが、やはり近世陶磁器片がわずかに出土している。

**第10トレント** 主屋南側の東西方向のトレントである。西端部で第7トレントに継続していると考えられる地山の傾斜変換点が確認され、これより西側は急速に地山面が傾斜している。

このトレントの西半部では中世段階の遺構と考えられる小ピットが7基確認された。いずれも埋土が暗灰色土であることから、昨年調査した中世の遺構の埋土と共に通するものであることから、今回遺物は出土していないが中世の遺構であると考えたものである。前回の調査成果とあわせても、建物等に復元するまでには至っていない。

中央部では昨年の2トレントで確認された便所の埋糞用の土坑の南端部が確認されたことから、この土坑は長径3mの上坑であることが明らかになった。

東半部には溝状の落ち込みが確認されているが、遺構の切り合ひ関係から見ると、すべて近世の遺構であると考えられる。性格等については不明である。

**3. まとめ** 今回の調査では、内田家の土間利用の変遷をほぼ明らかにすることができた。特にカマドについては、試掘調査で確認されていた4時期のカマド以外に、新たに1基（最古段階）カマドを検出することができた。先年まで使用されていたレンガ積みのカマドを含めると、6時期のカマドが構築されていたことになる。それぞれのカマドの詳細な時期については明確にはできなかったが、カマドの位置は次第に東側へ移動しており、これはイタノマに広縁が附属することや、土間空間を有効に利用することを目的として、5口のカマドから2口のカマドへ規模が縮小し、あわせて東側へ移動していった可能性が高いのではないかと考えられる。

また、唐臼については、当初から存在していたかについては明らかにすることができなかつたが、カマドの北東方向への移動に関連してか、少し南へ移動して現在の位置に据えられていたことが明らかになった。

ウマヤ部分は、当初ほぼ方形の平面プランを有していたものが、その後南北に長いプランに改変され、昭和40年代に居室として改造されたようである。

以上のように、土間の利用変遷過程についてはほぼ明らかになったが、それぞれの遺構については伴う遺物がほとんどないため、時期について明確にすることはできなかった。

また、東半部のトレント（第1トレント東半部・第2トレント・第3トレント東半部・第5トレント・第6トレント）では地山面を確認することができ、内田家を建築する際に相当削平し、西側を整地していることが判明した。

また、調査地中央部の第1・第5トレントでは、鎌倉時代後半頃の須恵器・土師器片が出土し、内田家住宅に伴わない柱穴・土坑なども確認されていることから、内田家住宅が建築される以前には鎌倉時代後半の集落遺跡が存在していることも確認された。

以上のように、調査区の東半部は後世の削平を受けているが、西側では削平を免れた!!

世段階の遺構が遺存していることが明確になった。

さらに平成16年度の調査では、内田家住宅の建築時期に關わる大きな成果をうることができた。第7トレンチと第10トレンチで確認された地山の急激な傾斜は、主屋の内部を発掘調査していないため明確なラインを引くことはできないが、座敷部分の下を通っていることは明らかである。それは、地山の傾斜面を埋めて整地しなければ、現在の内田家住宅を建築することができないということを物語っているのである。その結果、第7トレンチの整地土内から出土した陶磁器類の時期が概ね18世紀前半頃と考えられることから、内田家住宅の建築時期はこれを遡ることができないことになるため、建築の様式などから現在推定されている18世紀中頃の建築時期を改めて考古学的に確認することができるものといえる。

また、第9・10トレンチで確認された遺構についても、この整地の段階に遡る可能性も考慮されるが、明確にすることはできなかった。

内田家住宅には古いと考えられる部材が所々に使用されていたため、その建築時期が18世紀中頃を大きく遡る可能性が指摘されていた。しかし、今回発掘調査の結果、18世紀前半段階にこの場所で内田家住宅を建築することはできないものと判断され、古い部材等は再利用などの可能性が高くなったものといえる。

なお、当遺跡の詳細な成果については、平成17年3月刊行の『兵庫県指定重要有形文化財 内田家住宅保存修理工事報告書』(発行 神戸市)の「第3章 調査事項 第5節 発掘調査」を参照されたい。



fig.161  
1 トレンチ全景

## 23. 御藏遺跡 第54・55次調査

### 1. はじめに

御藏遺跡は六甲山系の南面、茹蘿川左岸の瀬戸内海に面する平野部に位置する。これまで行われた発掘調査の結果、縄文時代晚期から現代にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。「御藏」の地名は江戸時代、天領であった当地に御藏米の倉庫があったことによるとされる。考古学的には、発掘調査により縄文時代晚期から近世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。とりわけ律令期の遺構・遺物が注目され、この時期の遺構として大型掘立柱建物・井戸など、遺物としては縄釉陶器・灰釉陶器などのほか、官衙的施設の存在を示す瓦・硯・鍵などが確認されている。

第54-1次調査地の東隣地で行われた第14次調査およびその東の地区では律令期の大規模掘立柱建物等が確認されている。

第54-2次調査地の北隣地で昨年度行われた第52-2・53次調査では中世の扇、律令期の遺物包含層、古墳時代はじめの水田、弥生時代の水田などが確認されている。1970年頃、この地区で側溝工事が行われた際、第52-2・53次調査地の東にあたる交差点で地表下1.3mほどの深さから石塔多数（17基以上）が出土したという。

第54-3次調査地は、かつて東北行する小川が今回の調査地の南で方向を変え南西に流下する地点にあたり字境ともなっている。今回の調査区が区画整理以前の町名「北町」の南限で、この南が「御藏」となる。



### 2. 調査の概要

区画整理事業にともなう工事により遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。その結果、以下の通り遺跡が確認された。

### 御藏遺跡 第54-1次調査

**遺構面** 遺構面1枚が確認された。現地表（標高約5.0m）から70cm下がった3a層下面（標高約4.3m）が第1遺構面となり、律令期の遺構が多く検出される。掘立柱建物、土坑、溝などがある。ベースとなる土層は洪水砂（3c層）であり、弥生時代の遺物が含まれる。

**柱穴・土坑** 小大の柱穴・土坑が多数検出された。S P 23など14次調査においてその一部が確認さ

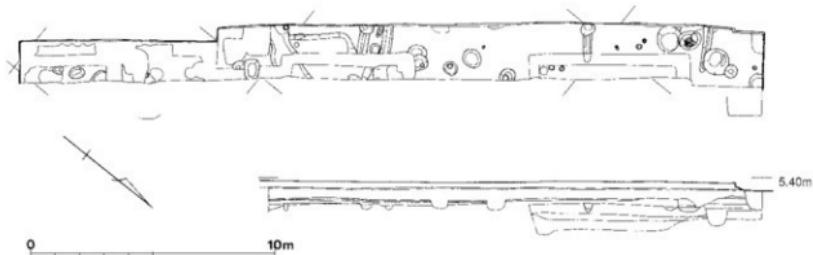


fig.163 第54-1次調査区 平面図・断面図

れた大型掘立柱建物の続きの柱穴も存在する。

柱穴・土坑からの出土遺物は少ないが、SK20から鉄淬が出土している。またプラン方形の大きな土坑であるSX01からは骨と馬の歯が出土した。この他、ごく新しい造構になるがSX02からは「電柱」が遺存しており、その根本には市電マーク・丸越マークまた「て」字の刻印が多数打たれる。

**下層洪水砂** 下層の洪水砂からは弥生上器・サヌカイト製石器等が若干出土している。掘削は標高約3.0mまで行ったが、これに覆われる土壤化層までは達しなかった。

#### 御蔵遺跡 第54-2・55次調査

隣地の住宅建設に先立つ発掘調査（第55次調査）と同時に行った。

**遺構面** 5枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通り。

|              |               |
|--------------|---------------|
| 現地表(1a層上面)   | : 約6.6m       |
| 第1造構面(3a層下面) | : 約6.0m       |
| 第2造構面(4a層下面) | : 約5.9m       |
| 第3造構面(5a層下面) | : 約5.8m       |
| 第4造構面(6a層上面) | : 約5.4m       |
| 第5造構面(7a層上面) | : 約4.6m・約5.1m |

**第1造構面** 中世の造構面で、耕作痕が検出された。馬歯も出土している。

**第2造構面** 奈良時代から平安時代初めの遺物を多く含む4a層の下面の造構面である。第54-2次調査地では造構は確認されなかったが、隣接地で昨年行った第52-2次調査地において掘立柱建物の柱穴かと推測される柱穴が検出されている。

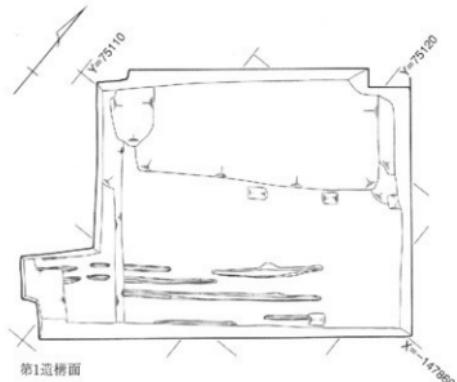
**第3造構面** 5a層下面で検出された造構面で北隣接地の第52-2・53次調査ではこの面は確認できなかった。造構面に凹凸があり、堆積土から湿地的な環境が推定される。不整形な溝・土坑が検出された。

**SK02** 4m×2mほどのプラン不整形の土坑。造構確認面からの深さ約50cmをはかる。口縁部を若干欠く古墳時代後期前半の蓋杯々身1点が出土した。

**第4造構面** 洪水砂層である5c層によって覆われる造構面である。SD04は、この洪水砂を切る溝である。6a層が耕土となる小区域水田5面が検出されている。北隣接地の第52-2・53次調査においても小区域水田7面が検出されている。水田は北東-南西方向に長く南北一

北東に狭いもので、後者の幅は3~4m程度、畦畔は幅約1.5m、高さ25cmの大畦畔と幅20cm高さ数cmの小畦畔がある。水田面には、数多くの足跡状のへこみが残されるが明らかに人間のものと確認できるものはなかった。水田3では鍔の刃幅13センチほどの鍔の打ち込み痕が数列にわたって確認されている。この状態から、水田が水害に襲われたのは水の張られていない段階であったと推測される。水田耕土からの遺物の出土はほとんどない。摩滅した土器小片が数点少量出土しているのみで、水田を覆う洪水砂も同様である。遺物からの時期比定はできない。

**第5遭構面** 厚く堆積する洪水砂6c層に覆われる8a層は、7a層同様の土壤化の進んだ土層となる。プランとして検出できなかったが、土層断面の観察により調査地の東半が西半にくらべ50cmほど高くなっている、段部分の上は畦畔状に若干高く、下は浅く溝状に凹む状況を



第3遭構面



fig.164 第54-2・55次第1・3遭構面平面図

fig.165 第54-2・55次第3遭構面全景

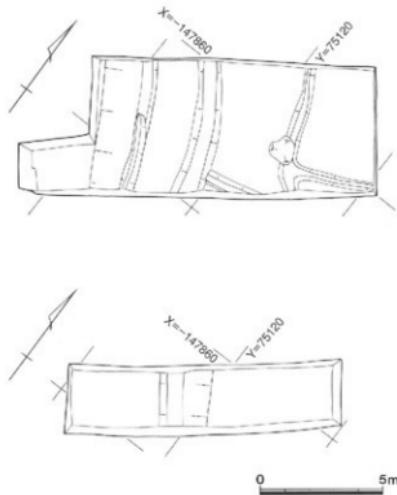


fig.166 第54—2・55次第4・5造構面平面図



fig.167 第54—2・55次第4造構面全景

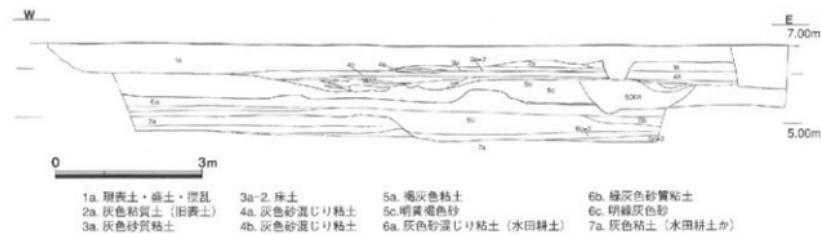


fig.168 第54—2・55次調査区断面図

確認できた。確言はできないがこの層が水田耕土となる可能性がある。7c層・8a層ともに遺物の出土は確認できなかった。第52-2・53次調査でも畦畔等は確認されなかつたが、その上面の検出・精査時に突帯文土器・サヌカイト製石鎌等の遺物が出土している。

御藏遺跡 第54-3次調査

2枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通り。

|              |        |
|--------------|--------|
| 現地表(1a層上面)   | :約7.4m |
| 第1遺構面(2a層下面) | :約7.0m |
| 第2遺構面(3a層下面) | :約6.9m |
| —(4a層上面)     | :約6.6m |
| —(5a層上面)     | :約6.1m |
| —(6a層上面)     | :約5.7m |
| —(7a層上面)     | :約5.5m |

第1遺構面 近世～近代の遺構面。石垣が検出された。

S W01 野面積みの石垣である。石垣前面は砂と土壤化の進んだシルトの堆積があり、おそらく側溝として湛水のあったことを確認できた。この堆積土からは、弥生土器・古代・中世・近世の陶磁器から近代の染付までが出土しており、近代に矢穴をもつ間知石をもちいた側溝が敷設されるまで使われていたものと考えられる。間知石をもちいた側溝は、1970年代にコンクリートで内側が塗りこめられ、コンクリート側溝となる。

当調査地の南で行われた調査においてはこの石垣は確認されていない。石垣の裏込めからは土器類が少量出土したが、ほとんどが中世のものであった。最終的には石材の下から寛永通宝が出土し、この石垣が近世のものであることが確認された。

軟弱な地盤であるため、石垣の下には径二～三寸の木杭が多数打ち込まれる。

第2遺構面 上層の遺構により破壊され遺存状況が悪いが、3a層下面が中世の遺構面となる。洪水砂3c層の掘削時に中世の遺物の出土があり、出土時はこの層からの出土と理解していたが、土層断面の観察により洪水砂を掘り込む遺構の存在が確認され、これらの遺物が遺構とともにうものである可能性が出てきた。



fig.169 第54-3次第1遺構面全景



fig.170 第54-3次石垣



fig.171 第54-3次石垣下土留杭

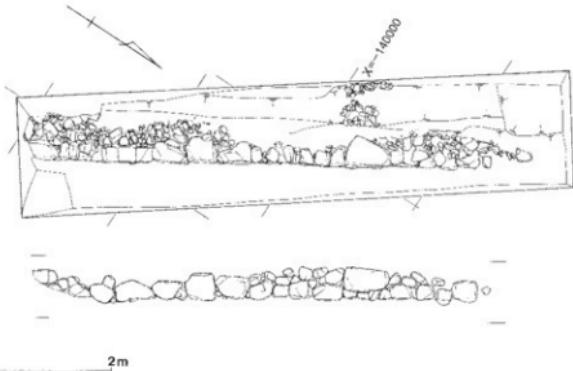


fig.172  
第54-3次  
調査区平面図

4a層以下 4a層以下7a層まで4枚の土壌化層を確認したが、いずれも遺物の出土はなかった。  
霧潤気的には4a層が第54-2次の5a層に、5a層が同6a層に対応しそうであるが、  
上層断面の観察においても畦畔らしい遺構は確認できなかった。

**3. まとめ** 第54-1次調査地およびその東に律令期の遺構・遺物が濃密に存在すること、他の地点は遺物が比較的多く出土するものの、この時期の遺構の存在は稀薄であることなど、基本的にこれまでの調査成果を追認する結果となった。他の時期はいずれの地点も耕地としての土地利用がなされるが、第54-3次調査地点では占墾時代以前について対応する土層らしいものは確認できたが、畦畔あるいは耕作痕は確認されなかった。小面積の発掘であり確定的ではないが、この付近から北は耕作地としても未利用地であった可能性が考えられる。

そういった中で第54-3次調査において確認された近世の石垣は新たな知見となる。この石垣は南へのびないことが確認されており、おそらく字境に従って西へ折れると考えられる。入念に基礎杭が打ち込まれ、これほどの大きさの石材を用いた石垣は単に耕地の段に積まれたものとは考えにくい。なによりも当地においては石垣自体が初めての確認である。字境に存在し石垣で開まれる敷地内にどのような施設が存在したのか興味深いものがある。

## 24. 松野遺跡 第39次調査

## 1 はじめに

松野遺跡は、古墳時代中期の豪族居館で著名な遺跡である。

しかし近年は松野町4丁目における区画整理事業に伴う調査が多くを占め、居館の北側には古墳時代の遺構・遺物が希薄であるということが明らかになってきている。



## 2. 調査の概要

今回の調査は、区画整理事業に伴う調査で、居館が調査された松野住宅のすぐ東に位置する。調査地の地形は、北から南、東から西へと緩やかに傾斜しており、造構面から湧水が確認できる部分もあった。

基本層序

I区は上層より、盛土・擾乱・暗灰色砂質土・淡灰黄色砂質土・淡黄灰色砂質土・灰褐色砂質土（遺物包含層）、黄色シルト（遺構面）となっている。II区は、I区の南であることから、包含層と遺構面の間にシルト層が分層できる。

遺構面はシルトベースが大半で、一部茶色粗砂ベースであった。この粗砂は南半の西に拡がり、摩滅した弥生土器・石鏃が出土している。

18

満2条、落ち込み1基、ピット21基を検出した。遺物包含層からは古墳時代中期の須恵器片が出土しているが、遺構からの遺物は少量で、時期の判断のつくものはほとんどなかった。ピットは調査区の北西で多く検出され、埋土は暗灰色シルトと淡灰色シルトの2種類確認できた。直径は0.2~0.4m、深さ0.2~0.4mを測り、炭化材の含まれるピットもあった。

二区

溝2条、ピット2基を検出した。また、耕作痕の残存したものと考えられるしみ状のものを少し確認している。

満SD01は平成14年度に調査を実施している第35・36次調査地でも検出されている。遺物は碎片であるが、古墳時代の須恵器・土師器を少量含んでいた。幅0.5~0.8m、深さ0.1mを測る。

3. ま と め 今回の調査は最近ではあまりみられない300m<sup>2</sup>を越す調査面積であったが、遺構は非常に希薄で、遺物はあまり出土しなかった。やはり、居館の周辺には隔絶の意味を持たすために、いずれの施設も設けられていなかったと考えられる。また、中世の遺構が周辺では散見されているが、遺構埋土に遺物をほとんど含まないこともあって、時期の不明な遺構がほとんどであった。

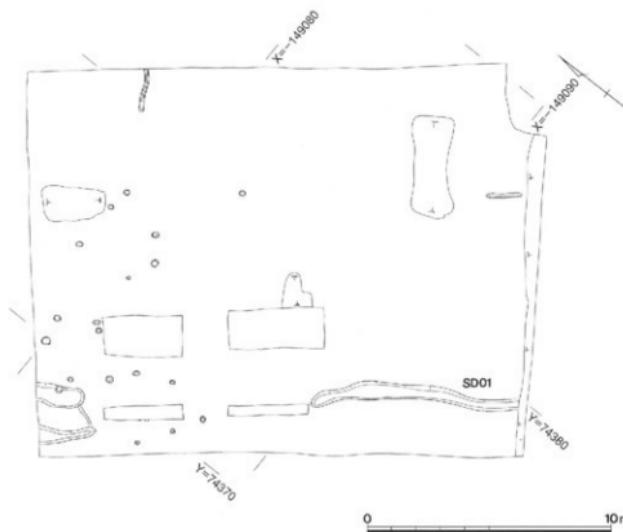


fig.174  
調査区平面図



fig.175  
調査区全景

## 1. はじめに

大橋町遺跡は、JR新長田駅の南側100mほどの場所に立地する遺跡である。周辺には、日吉町から松野通に広がる松野遺跡（古墳時代）・腕塚町から二葉町にかけて広がる二葉町遺跡（中世）が存在する。大橋町遺跡はその両者のちょうど中間地点に位置している。

平成15年度末に行なった市街地再開発に伴う試掘によって平安時代の遺物・柱穴などの遺構が確認され遺跡の存在が明らかになった。

今年度は、遺跡内の工事予定範囲について移転・撤去が終了した所から順次発掘調査を実施した。



## 2. 調査の概要

今回検出された遺構は、弥生時代の溝1条、古墳時代の溝1条、飛鳥～中世の多数の鍔溝、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物9棟・井戸2基・土坑6基・墓1基・落ち込み2基・溝5条・ピット、近世の水溜1基・井戸5基である。

弥生時代から古墳時代にかけてはそれぞれ溝が1条検出されている。特に古墳時代の溝は検出長39.0m、幅1.5~2.5m、深さ10~60cmを測る大規模なものである。断面形は北側では崩れているが、南側ではV字状を呈する。直線的に掘削されていることもあり、区画溝のようなものと考えられる。

飛鳥時代から建物群が形成される平安時代後期頃までは、幅20cm、深さ10cm前後の鍔溝が検出されており、耕作地であったと考えられる。飛鳥時代と考えられる溝の方向はN25°Wで、奈良から平安時代については現在の区画に直交もしくは平行すると考えられる。

平安時代後期～鎌倉時代は遺跡の最盛期で、掘立柱建物SB102～105・109の5棟の西建物群と、掘立柱建物SB106～108の3棟の東建物群が確認された。それぞれの建物群には井戸が伴っており、完結した屋敷地と考えられる。さらに後者には建物に沿うように土坑墓ST101が検出され、須恵器壺・土師器皿が出土した。検出状況から、屋敷墓と考え

られる。これらの屋敷の東で検出された S D 1103 は、それより東側で同時期の建物跡など遺構が希薄なため、居住域の境界的な役割をもつものと考えられる。

また、今回の調査では二葉町遺跡や、松野遺跡で検出されている水溜状遺構とされる大型土坑が検出されている。

**3. まとめ** 今回の調査では、主に平安時代末～鎌倉時代初頭の集落が確認された。集落の形成以前は、耕作地として飛鳥時代～平安時代まで土地利用されてきたことが判明し、耕地が居住地に変遷してゆく過程が明らかになった。また、集落についても平安時代末～鎌倉時代前半頃までの比較的限定された期間で、この時期の集落の形成過程を考えるための貴重な調査となかった。また同時期の屋敷墓である S T 101 についても当時の墓制を知る上で興味深い。さらに水溜状遺構 S X 101 は、盛土により通路を設置するという、これまでに調査されたものと異なる構造をもつことから、同種の遺構の使用状況を比較研究するための格好の資料となるであろう。

なお、当遺跡の詳細な成果については、平成18年3月刊行の『大橋町遺跡 第1次－1～6 調査発掘調査報告書』を参照されたい。

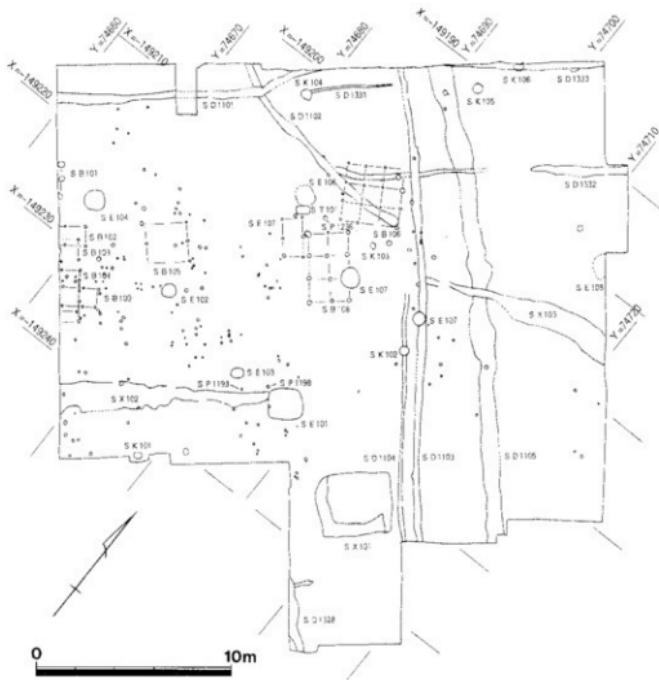


fig.177  
調査区平面図

## 26. 二葉町遺跡 第18次調査

### 1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系から流れる妙法寺川と茹藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する集落遺跡である。昭和63年の第1次調査以来継続して発掘調査が実施されており、今年度は第18次に当たる。

平成8年度からは新長田駅南第2地区の市街地再開発事業に伴い、腕塚町6丁目・久保町6丁目および二葉町6丁目で調査が行われており、縄文時代晩期の自然流路、弥生時代前期の溝、奈良時代の掘立柱建物・井戸、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・鳥帽子を伴う木棺墓などが検出された。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され井戸桿として転用された「複材構造船」は当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている。



fig.178  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 18-1区

調査地は、5箇所に分かれておりそれぞれ18-1～5区とした。

当調査区は盛土直下が遺構面となっていた。調査区西半部はすでに既存建物の基礎等の影響により遺構面が削平されていた。よって遺構は調査区の東半部に残存するのみで、10数基のピットが検出された。全て北西から南東に並んだ状態にある。遺構内からの遺物は少ないが土器器細片などが出土した。

#### 18-2区

当調査区も基本層序は18-1区と同じで、明確な遺物包含層は見られない。遺構面は北

辺から約5mの所で40cmの段を成して下がっており、近世以降の耕地化によって削平を蒙ったものと推定される。計5基の土坑が検出された。SK01からは須恵器・土師器の細片と共に明代と思われる墓筒底の青花皿片が検出された。またSK04からは12世紀代の瓦器碗が出土したが、その他の土坑からは須恵器・土師器の細片のみで現在時期を特定できない。

18-3区 当調査区の基本層序約30cmの盛土下に10cm程の旧耕土があり、その直下が造構面となっ

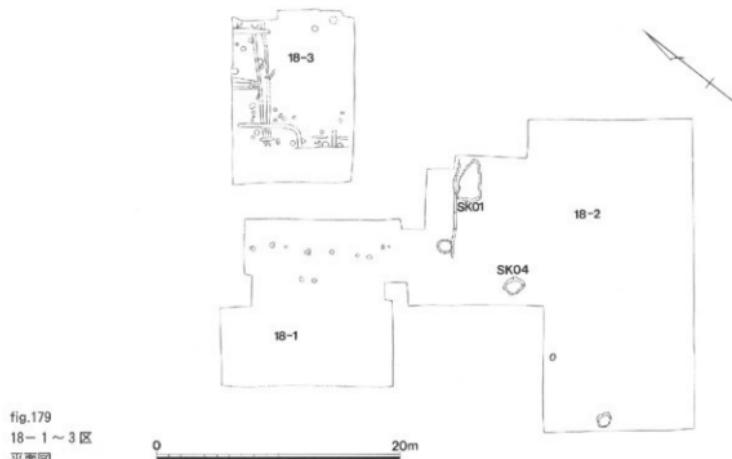


fig.179  
18-1～3区  
平面図



fig.180  
18-3区全景



fig.181 18-4 区全景

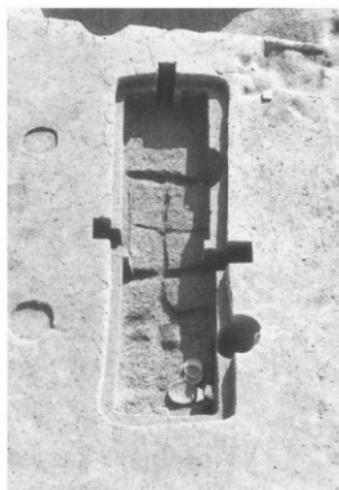
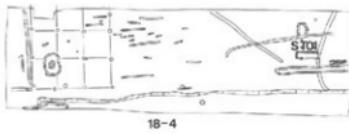


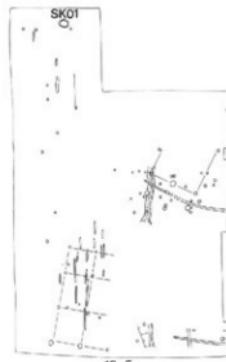
fig.182 S T01



18-4



fig.183 18-4 + 5 区平面図



18-5

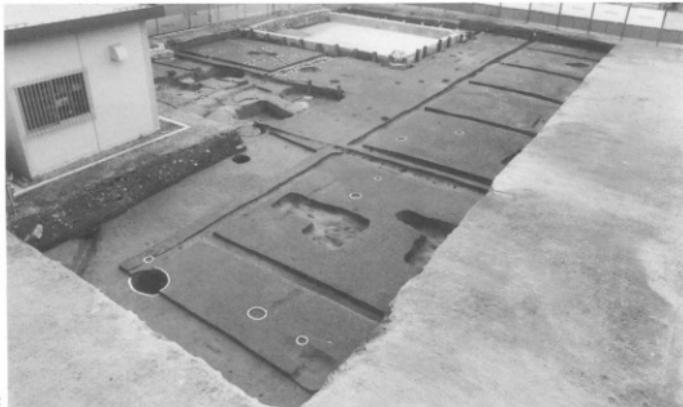


fig.184  
18-5区全景

ている。ただ調査区北東部には中世の遺物を含む約10cm黒色砂層があった。多数のピットや溝、土坑が検出されたが調査区南西部は既存建物の基礎で搅乱され、土坑2基を検出したのみである。包含層出土遺物に黒色土器A類が含まれ、ピットの中には10世紀代と思われる土師器羽釜片を検出したものがある。

**18-4区** 当該地の基本層序は約30cmの盛土—約25cmの近現代耕土—約20cmの中世旧耕土の下が遺構ベースの黒褐色粗砂混じり粘土となっている。

堀立柱建物、井戸、木棺墓や溝などが検出された。堀立柱建物は先年度に調査した東接する16次調査区に延びているもので、東西4間、南北3間の建物として復元できる。柱穴の1つが後述の井戸によって破壊されている。井戸は東西約1.8m、南北約1.4m、深さ約90cmで底部に直径約30cm、深さ約70cmの水溜が設けられている。底部付近から12世紀代の瓦器椀が出土した。

木棺墓（S T 01）は調査区の南端近くで検出したもので、南北方向に主軸を置く。南北長1.9m、東西幅60cmの長方形土壙内に南北長1.8m、東西幅約44cmの木棺を安置している。棺材の厚さが約3cmであったことが土色変化部から推定される。棺内北西隅から上飾器小皿2枚とその上に赤漆塗りの皿及び黒漆塗りの皿が各1枚あり、それらの西に2個体の白磁碗の破片が3片と、長さ約20cm、幅約3cmの鉄刀が先を南に刃部を西に向けた状態で検出された。12世紀代のものと考えられる。

**18-5区** 当該地の基本層序は18-4区と同じである。堀立柱建物、土坑や溝などが検出された。堀立柱建物は2棟復元でき、いずれも東西3間、南北2間と考えられる。西側の建物の北西隅の柱穴から完形に近い12世紀代の須恵器椀が出土した。調査区東端の土坑（SK 01）は東西65cm、南北80cm、深さ約60cmで底部から結晶片岩を含む扁平な石と共に須恵器椀、瓦器椀が出土した。いずれも12世紀代と思われる。土坑の性格は不明である。

**3. まとめ** 調査区によっては搅乱による削平が目立ったものの、本年度の調査においても平安時代から鎌倉時代にかけての時期を中心とした遺構・遺物が確認された。遺構の種類も多様で集落構造を知る上で貴重な資料を得ることができた。

27. 戎町遺跡 第56-2次調査

## 1. はじめに

戎町遺跡は、六甲山南麓を流れる妙法寺川の扇状地形の微高地に形成された遺跡である。これまでの調査から、弥生時代前期～中世にかけての複合遺跡であることが明らかになってきている。特に近年、遺跡の南側で実施されている区画整理に伴う発掘調査では、弥生時代中期の方形周溝墓が多数確認されている。



fig.185  
調査地位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査は、区画整理事業に伴う調査で、調査最終年度にあたる。寺田町2丁目の南北街路のうち、中央部分27mについては先年度調査を終えており、北側（I区）と南側（II区）の調査を実施した。

基本層序

I区は上層より、盛土・擾乱・黄橙色粗砂質土・淡灰色粘質土・暗灰色石混じり砂質土(遺物包含層)・褐灰色粘質土(遺構面)・淡灰茶色シルトとなっている。遺物包含層は調査区内全体に約15cmの厚さで存在し、遺構面は調査区の北西で砂質がつよい傾向があった。

II区は、I区と比べると地表面から遺物包含層までの深さが深く、地表面ではあまり感じられない北から南への傾斜が存在し、遺物包含層上面での比高差は約0.7mを測る。また、遺物包含層からの遺物はI区よりかなり多く含まれていた。

18

第50-3次調査の北側に位置し、溝1条、土坑・落ち込み2基、ピット2基を検出した。

S D01

第50-3次調査の遺構検出状況から、方形周溝墓の北辺の溝と考えられる。この溝はやはり不整形であるが、幅2.2~3.0m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色粘土、黄灰色粘土、灰色石混じり粘質土、灰褐色細砂質土で、遺物は底面に近い灰色石混じり砂質土層から多く出土している。ただし、周溝墓によくみられる完形品は含まれていない。

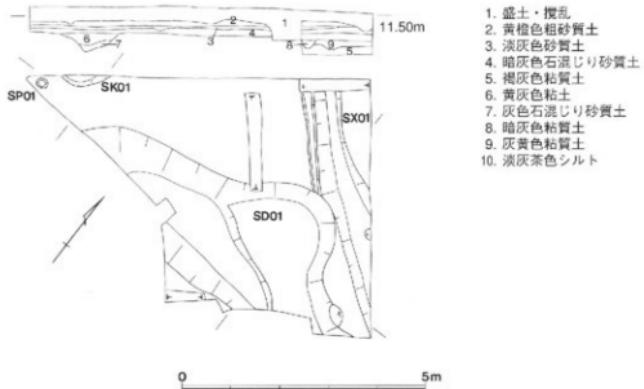


fig.186  
I 区平面図・断面図

0 5m



fig.187 I 区全景

II区 第50-3次調査の南側に位置し、堅穴住居1棟のはか溝、土坑・落ち込み、ピットを検出した。

**S B01** 推定直径5.4mを測る円形の堅穴住居で、遺構の大半は西側へと拡がっている。周壁溝とベット状遺構をもち、柱穴は4基確認している。検出面より床面までの深さは30cmで、ベット状遺構との高低差は10cmである。4基ある柱穴のうち西壁に接する2基については、住居址の埋土を切り込んでいることから、S B01に伴わない可能性が高い。遺物は弥生土器が出土しているが、細片であるため時期の詳細は不明である。

**S D02** 調査区の中央で検出した南北方向の溝は、東壁付近で東へ屈曲している。幅0.6~1.0m、

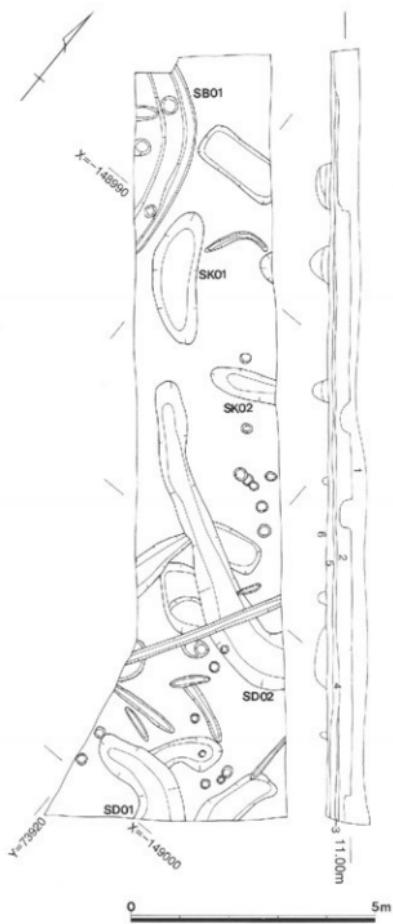


fig.188 II区平面図・断面図

1. 盛土・埋乱
2. 淡黄灰褐色粘質土
3. 青灰色粘質土
4. 淡灰黄色粘質土
5. 喙灰色石混じり粘質土
6. 茶褐色粘質土



fig.189 S B01



fig.190 S K02



fig.191 S D02

深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、弥生時代中期の甕などが出上している。

**S K02** 東側は調査区外へと抜がっているこの土坑からは、弥生時代中期の直口甕、甕、鉢がほぼ完形の状態で出土している。幅0.6m、深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰褐色石混じり粘質土、褐灰色粘質土で、遺物は下層の埋土より出土している。遺物の上部は摩滅を受けている。

**SK07** 方形を呈するこの土坑は長辺1.9m、短辺0.8m、深さ30cmを測る。底面は平坦で、遺物はほとんど出土していない。

**ピット** 調査区内で建物は確認できなかったが、直径はいずれも20cm程度、深さは10~50cmを測るものもあった。

**3. ま と め** I区においては周溝と考えられる溝（S D01）が確認できたが、II区については溝の方向や深さ、埋土等から考えて、周溝と断定できる溝は確認されなかった。

堅穴住居（S B01）の時期の確定ができていないものの、これまで多くの方形周溝墓が確認されている場所で堅穴住居や柱穴が検出されたことは、集落域と墓域のありようを考える上で、注意が必要であろう。

今後、調査成果を合わせていくことで、遺跡の全体像が明らかになっていくと考えられる。それぞれの遺構の時期については、遺物の整理が進んだ段階で改めて言及したい。



fig.192 II区全景

## 1. はじめに

遺跡の南側で実施されている鷹取東第二地区区画整理による個人住宅建設に伴う発掘調査である。

調査地は、区画街路に伴う第56-1次調査地と隣接している。



fig.193  
調査位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

旧建物の基礎等により、調査地の約1/2は削平されていたが、深い遺構（S D01）は一部残存していた。

## 基本層序

層位は上層より、盛土・擾乱、黄白色石混じり砂質土、黒褐色石混じり砂質土（遺物包含層）、黄褐色粘質土（遺構面）で、遺構面は南側で砂質が強い。

## S D01

調査区のはば中央を東西に横切る。幅2.0m、深さ45cmを測り、U字形の断面を呈する。弥生時代中期の壺の破片が出土している。

東に隣接する街路の調査でもこの溝と同一と考えられる溝が検出されている。このことからも、この溝は周溝の溝ではないと考えられる。

## S X01

幅約1.5m、深さ20cmを測る。北側は調査区外へ拡がり隣接の調査で検出されているが、遺構の北端は判明していない。

## S X02

S D01と切りあい、幅1.6m、深さ30cmを測る。底面がやや方形であり、S D01内のS K02へつながる可能性を考えると、周溝の一部であると考えられる。遺物は弥生土器が細片で出土したにとどまる。また、南の隣接調査地から南北方向の周溝が検出されている。

## 3. まとめ

今回の調査は、旧建物の基礎によって遺構面の約半分が削平されていたが、多くの遺構を検出した。四方の隣接地はこれまでに調査されていることから、今後、調査成果を合わせていくことで、遺跡の全体像が明らかになっていくと考えられる。それぞれの遺構の時期については、遺物の整理が進んだ段階で改めて言及したい。

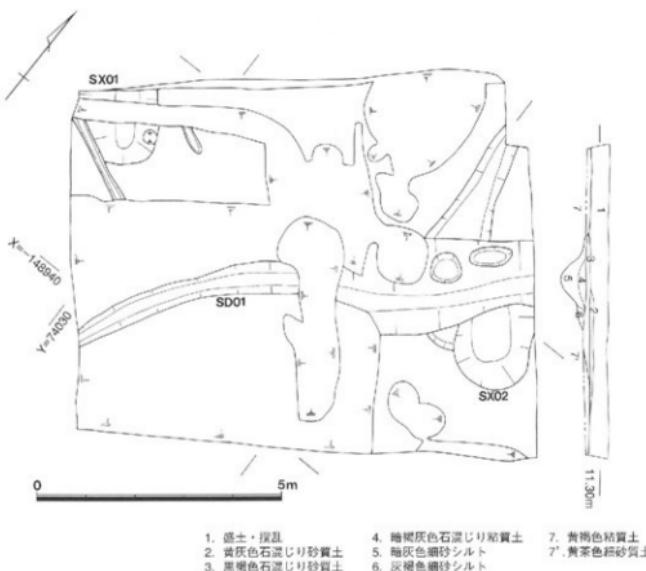


fig.195 調査区平面図・断面図

## 1. はじめに

戎町遺跡は市営地下鉄板宿駅から大田町交差点の一带に拡がる大きな遺跡で、妙法寺川が形成した扇状地や自然堤防上に立地している。

昭和62年に戎町3丁目で第1次調査が実施されて以来、これまでの発掘調査で縄文時代晚期から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が確認されている。中でも弥生時代の内容は特に注目され、六甲山系南麓最西端の位置にある拠点集落であったと言える。また弥生時代前期の水田や、木製未製品の貯木遺構が検出されている。また平成13年度以降、遺跡の南東の端付近で震災復興土地区画整理事業に伴う発掘調査が数多く実施され、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されるようになった。これまでに確認されている集落域と合わせて墓域がセットになった状態で確認されたこととなり、当時の人々の一生が良好に復元できる遺跡であることが明らかになりつつある。



## 2. 調査の概要

調査地点の周辺の地割方向は正方位方向から約45°振れているが、実際の調査に際しては、地形の斜面上方である北西方向を便宜上北、斜面下方である南東方向を同じく南として調査を進めていった。

## 基本層序

調査区の基本層序は、上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土、旧耕作土が2層、弥生時代遺物包含層、地山と続く。第1遺構面は弥生時代遺物包含層の暗灰茶色砂質土の上面、第2遺構面は地山の淡褐色砂質土の上面である。

発掘調査期間中に東側街路部分で下水道敷設工事が実施され、地山の淡褐色砂質土とした層のさらに下層から黒灰色シルトの層が観察されたため、第2遺構面以下をさらに断削して遺構・遺物の有無を調査したが、全く確認されなかった。

## 第1遺構面

遺物は、ほとんど弥生土器しか出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、周辺での街路部分の調査事例から判断して鎌倉時代頃と弥生時代中期の遺構面が同一面化したも

のと考えられる。溝2条・上坑1基・落ち込み1基を検出したが、上坑はさらに上層から掘り込まれたものである。

**S D101** 調査区のはば中央で検出した南北方向の溝である。溝の南北両端が調査区外に続くため全長さは不明であるが、長さ4.5m以上、幅0.7~0.9m、深さ約30cmである。断面は逆台形であるが底面には若干起伏がある。埋土は上層が黒茶色砂混じりシルト、下層が白灰色細砂で、下層には水流に伴うラミネーションが観察された。遺物は須恵器・弥生土器・サヌカイトが出土した。第1構造面の直上は旧耕作土であること、溝の方向は周辺の地割方向と一致していること、ラミネーションがあることから、溝の性格は耕作に伴うもので、時期は周辺の耕作地化が進んだ鎌倉時代頃と推定できる。

**S D102** 調査区の南東隅で検出した溝である。両肩を検出したのではないが、平面や底部の形状から溝と判断される。全長は不明であるが、長さ1.4m以上、推定幅1.0m、深さ約30cmである。断面は緩やかな逆台形で、底面は比較的平坦である。埋土は暗灰茶色土で、遺物は弥生土器が出土した。

**S K101** 調査区の南辺西寄で検出した円形の土坑である。部分的に調査区外に続いているが、直径1.6m、深さ約60cmで、底面は平坦である。桶を埋設した土坑で廃棄時に部材を抜き取って埋め立てているが、蓋の部分は遺存していた。埋土は埋立土が淡黄色シルト・灰色シル

fig.197  
第1構造面平面図

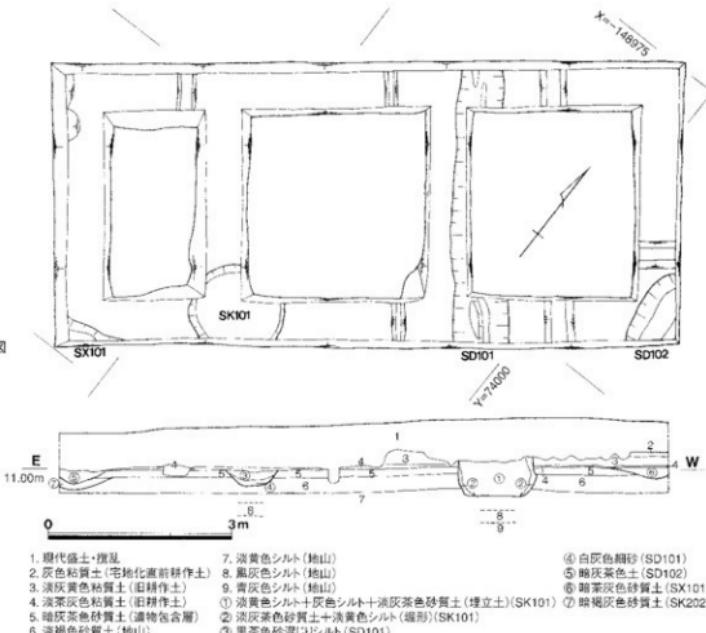


fig.198 調査区断面図

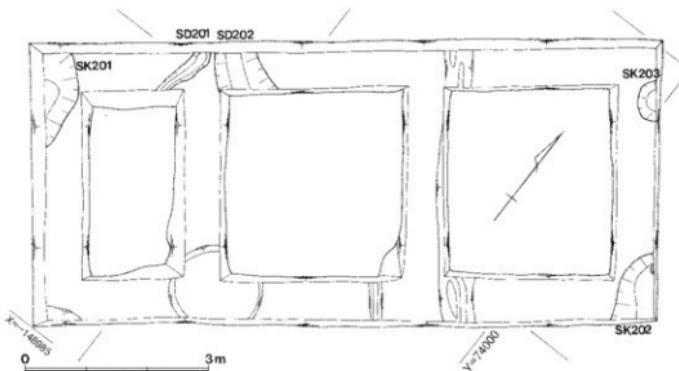


fig.199  
第2遺構面平面図

ト・淡灰茶色砂質土の混和したもの、掘形が淡黄色シルト・灰色シルト・淡灰茶色砂質土の混和したものである。弥生土器が少量出土したが、南壁面の観察ではこれのみ掘り込み面は旧耕作土上からであったため、江戸時代頃の遺構と推定できる。

**S X101** 調査区の南東隅で検出した落ち込みである。一部分を検出したのみで、平面形状や全体の規模は不明である。

周囲からは浅く傾斜するが、底部はさらに一段深くなっている、深さは約20cmである。埋土は暗茶灰色砂質土で、遺物は弥生土器が出土した。溝S D102と形状を比較して落ち込みとしたが、溝の一部分である可能性も残る。

**第2遺構面** 弥生時代中期の遺構面で、溝2条・土坑を3基検出したが、周辺の調査事例で確認されている方形周溝墓については今回明確なものは確認できなかった。

**S D201** 調査区の北辺西寄で検出した溝である。南北両側が調査区外に続いたため全長は不明である。長さ1.1m以上、幅約30cm、深さ約20cm、断面は楕円状である。埋土は暗灰褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。

**S D202** 溝S D201の東隣で検出した溝である。これも南北両側が調査区外に続いたため全長は不明である。長さ1.0m以上、幅約80cm、深さ約20cm、断面は逆台形である。埋土は暗灰褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。

**S K201** 調査区の北西隅で検出した土坑である。一部分を検出したのみで、平面形状や全体の規模は不明である。断面はやや不整な深皿状で、深さは約25cmである。埋土は茶灰色砂質土で、遺物は出土しなかった。

**S K202** 調査区の南東隅で検出した土坑である。一部分を検出したのみで、平面形状や全体の規模は不明である。断面は楕円状で、深さは約25cmであるが、北寄りの部分にピット状に約5cm窪む部分がある。埋土は暗褐灰色砂質土で、窪む部分は暗褐灰色土で、遺物は弥生土器が出土した。

**S K203** 調査区の東辺北寄で検出した円形の土坑である。直径0.7m、断面は深い鉢状で、深さは約35cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、弥生土器が多く出土した。その中には台形土器のほぼ完形品が含まれていた。

3. まとめ 我町遺跡はこれまでの調査によって弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代初頭・平安時代末～鎌倉時代の遺構面を持つ複合遺跡であることが解明されているが、中でも弥生時代の遺構・遺物は特に優れており、畿内最西端の拠点集落と位置づけることができる。

今回の調査地点は区画整理事業地内の個人住宅新築に伴うものであり、近年周辺では弥生時代中期の方形周溝墓群が確認されている。発掘調査は工事影響範囲について、幅約60cmの幅で実施した。調査の結果遺構面を2面確認することができた。

第1遺構面は鎌倉時代頃と弥生時代中期が同一面化しているものと考えられる。区画整理事業地内のこれまでの発掘調査では鎌倉時代頃の遺構が確認されている事例と確認されていない事例があるが、本地点周辺では確認されている事例が多く、後世の耕作でも遺構が削平され残っていることが判る。しかし遺跡内でも板宿駅近辺では当時の集落が確認されているが、この周辺では明確な建物等は確認されていないため、当時も居住域ではなく耕作地であった可能性が高い。

第2遺構面は周辺で方形周溝墓群が検出されている遺構面である。しかし今回の調査では方形周溝墓の周溝と明確に考えられる溝は検出されなかった。ただし今回は調査面積に制約があり、調査区隅で検出した土坑SK201・SK202は周溝の一部であった可能性も残る。今後隣接地の発掘調査が実施される機会があれば、その正否も明らかになっていくことであろう。



fig.200  
第2遺構面全景

### 30. 戎町遺跡 第59次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、妙法寺川に形成された扇状地の末端部に位置する遺跡である。昭和63年に弥生時代前期の水田が発見された事に始まり、現在までに59次の調査が実施されている。これらの調査結果から、戎町遺跡は繩文晩期～中世までの、幅広い時期に生活が営まれた遺跡である事が判っている。

今回実施した調査地周囲では、弥生時代前期の水田や川の他、弥生中期の竪穴住居等の集落に伴う遺構や壺棺墓、弥生後期の集落に伴うと考えられる柱穴や土坑が発見されている。



fig.201  
調査地位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回は商業ビルの建築に伴い、第59次調査を実施した。

基本層序

基本層序は盛上、暗灰褐色砂質土（旧表土）、淡黃灰褐色砂質土、黒灰色砂質土、黒褐色砂質土（上面が第1遺構面）、灰褐色砂質土（上面が第2遺構面）、暗褐色中砂～粗砂（上面が第3遺構面）、以下洪水砂か疊生時代前開河道（第4遺構面）と続く。

第1禮讚面

弥生時代中期後半の遺構面である。当該時期の集落に伴う遺構を検出している。

S B 101

直径約4.0mで、深さ約25cmを測る、円形の堅穴住居である。南半分はS D101により削平されている。柱穴も3ヶ所で確認されているが、堅穴住居に伴うか不明である。

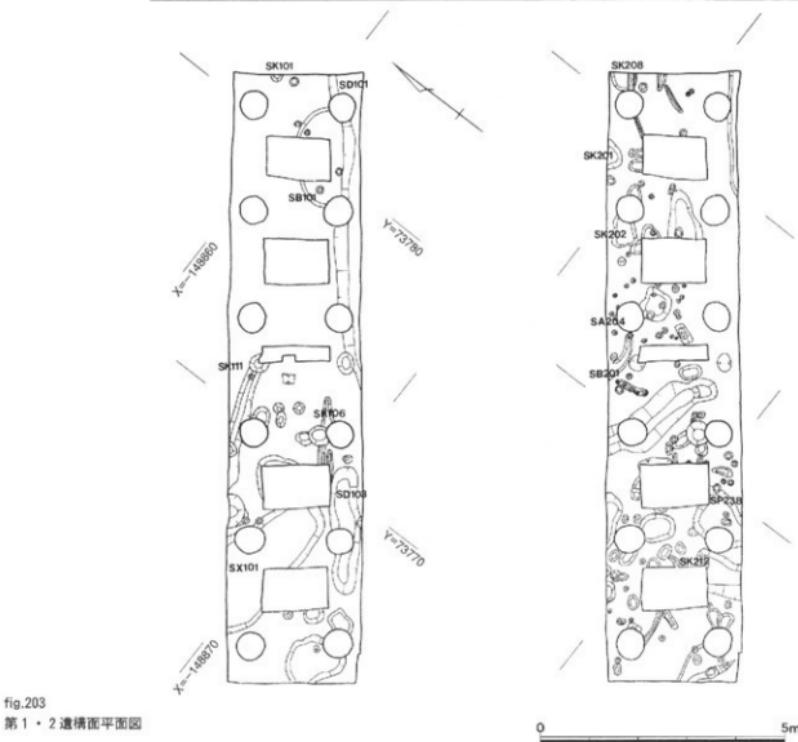
堅穴住居の廃絶後に、多量の弥生時代中期後半の土器が投棄されている。これらの土器に混じり、菅玉も出土している。

SD 101

北東～南西方向に延びる溝である。この溝の南半分は、調査区外へと続いている。幅約140cm以上で、深さ約22cmを測る。弥生時代中期後半の土器が出土している。

S D 103

幅約120cmで、深さ約25cmを測り、北東～南西方向に延びる溝である。弥生時代中期後半の上器が少量出土している。



- S K101 調査区の北東端で検出した不整円形の土坑である。幅約50cmで、深さ約12cmを測る。ミニチュア土器の壺が2個体出土している。
- なんらかの祭祀に関連する遺構である可能性も存在するが、調査区の壁面にかかり半分だけ検出した遺構でもあり、真偽は不明である。
- S K106 調査区の中央で検出した、不整円形の土坑である。幅約80cmで、深さ約11cmを測る。弥生時代中期後半の土器が多数出土している。
- S K111 調査区の中央で検出した、不整円形の土坑である。幅約東西76cm×南北90cmで、深さ約35cmを測る。弥生時代中期後半の土器が少量出土している。
- S X101 調査区の南西側で検出した、不整形の落ち込みである。幅約東西2.4m×南北7.2mで、深さ約15cmを測る。弥生時代中期後半の土器が多数出土している。
- 第2 遺構面** 第1 遺構面と同じく、弥生時代中期後半の遺構面である。当該時期の集落に伴う遺構を検査している。
- S A201 調査区のほぼ中央で検出した、直徑約2.7mの円形に周る柵列である。径約12~26cmで、深さ約6~39cmを測る柱穴が約20ヶ所で確認されている。
- 遺物は少數のピット内から、時期不明の弥生土器の細片が、わずかに出土しただけである。
- S B201 調査区のほぼ中央で検出した、おそらく円形になると予想できる堅穴住居である。住居の北東側は削平されて、遺存していない。幅約2.0m以上で、深さ約13cmを測る。周縁溝が存在しており、これは幅約26cmで、深さ約9cmを測る。ピットも多数存在するが、堅穴住居に伴う遺構であるか不明である。
- 遺物は時期不明の弥生土器の細片が、わずかに出土しただけである。
- S D204 調査区のほぼ中央で検出した、ほぼ南北方向に延びる溝である。幅約1.4mで、深さ約50cmを測る。弥生時代中期後半の土器が出土している。
- S K201 調査区の北東側で検出した、不整円形と考えられる土坑である。幅約126cmで、深さ約23cmを測る。弥生時代中期後半の土器が多数出土している。
- S K202 調査区の北東側で検出した、方形に近い不整形の土坑である。幅が東西約90cm×南北約130cm以上で、深さ約18cmを測る。弥生時代中期後半の土器が少量出土している。
- S K208 調査区の北東端で検出した、不整円形の土坑である。幅約110cmで、深さ約31cmを測る。少量の弥生時代中期後半の土器と共に、植物の種子が多量に出土している。ただし、この種子が土坑内に保管されたものか、流れ込んだものかは判断できない。
- S K212 調査区の南西側で検出した、不整円形の土坑である。幅約38cmで、深さ約14cmを測る。弥生時代中期後半の土器が出土している。
- S K221 調査区のほぼ中央で検出した、方形に近い不整形の土坑である。幅が東西約144cm×南北約120cmで、深さ約17cmを測る。弥生時代中期後半の土器が多量に出土している。
- S P238 調査区のほぼ中央で検出したピットである。幅約28cmで、深さ約34cmを測る。イイダコ壺が出土している。
- 第3 遺構面** 洪水砂か河道の上面で検出した遺構面である。ピットが多數検出されているが、遺物は少なく、遺構の時期は特定できていない。



fig.204  
第2造構面全景  
(西半)



fig.205  
第2造構面全景  
(東半)

**ピット群** 幅約10~26cmで、深さ約5~17cmを測るピット群である。調査区の全体にわたり多数を検出しているが、建物や柵列としては確認できなかった。

遺物は、時期不明の弥生土器が少量出土しただけである。

**第4造構面** 弥生時代前期の河道が検出されている。工事の影響深度を超えるために、トレンチで一部を調査したのみに止まる。

**河道** 調査区の北東側に設定したトレンチで、河道の北肩を検出している。南西侧では工事の



fig.206  
第3遺構面全景



fig.207  
第4遺構面全景

